

平成28年度北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業

時 期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会の開催			第1回 6/28						第2回 12/8			第3回 3/21
委員による意見交換会			鶴居地区 6/23	里平地区 7/14 別海地区 7/25				七飯地区 11/11			岩見沢市 北村豊正 地区 2/28	湧別地区 3/14
指導員 関連事業	Web版 里づくり (毎月)	第1回幹事会 (札幌) 5/26	道東ﾌﾞｯｸ (帯広) 6/16～17	情報誌13号 7/21	道北ﾌﾞｯｸ (南富良野) 8/1～2 道央ﾌﾞｯｸ (喜茂別) 8/24～25	地域づくり 研修会(札幌) 第1回指導員会 第2回幹事会 9/29	現地研修 (旭川) 10/6～7	道南ﾌﾞｯｸ (八雲) 11/10～11		幹事会 (札幌) 1/25 AM 指導員会 (札幌) 1/25 PM	全国研修 (東京) 2/15～16	情報誌14号
その他			全国担当者 会議 6/13									

平成28年度北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業実績

1 地域活動支援事業

- (1) 実践活動地区(6地区)
鶴居村鶴居地区、日高町里平地区、湧別町湧別地区、別海町別海地区、七飯町七飯地区、岩見沢市北村豊正地区
- (2) 住民意識醸成地区(1地区)
当麻町当麻地区

2 研修事業

- (1) 指導員の委嘱 61名(平成28年3月21日現在) 新規6名委嘱
- (2) ふるさと水と土基金全国研修会 6名(うち指導員5名)
 - ・日程:平成28年2月15~16日
 - ・場所:東京都渋谷区代々木 国立オリンピック記念青少年総合センター
 - ・内容:講演「プロジェクトの着眼から実現まで」(株)紡 代表取締役 玉沖仁美氏、
「アグリベンチャー舞台ファームの取組」(株)舞台ファーム代表取締役 針生信夫氏 他
活動紹介「新ご当地グルメ「森らいす」誕生」北海道森町農林課長 宮崎渉氏 他
- (3) 地域づくり研修会 59名(うち指導員27名)
 - ・日程:平成28年9月29日
 - ・場所:札幌全日空ホテル3F 祥雲の間
 - ・内容:基調講演 中井景観デザイン研究室代表 中井和子氏
活動報告 北竜町ひまわり観光協会事務局 南波 肇氏
北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会から 山本忠男座長
- (4) 現地研修 27名(うち指導員20名)
 - ・日程:平成28年10月6~7日
 - ・場所:旭川市、名寄市、当麻町、剣淵町
 - ・内容:田んぼの学校、くるみなの木遊館(当麻町)、上野ファーム(旭川市)、
けんぶち絵本の館(剣淵町)、もち米の里なよろ(名寄市)、意見交換会
- (5) 北海道ふるさと・水と土指導員会 48名(うち指導員31名)
 - ・日程:平成29年1月25日
 - ・場所:かでの2・7
 - ・内容:活動紹介 外山陽一指導員(雨竜町)・高橋徹指導員(浦幌町)、グループ討議
- (6) 北海道ふるさと・水と土指導員会幹事会
 - ・日程:平成28年5月26日、平成29年1月25日
 - ・場所:道庁内会議室
 - ・内容:「里づくり」、ブロック別ミーティング、地域づくり研修会の企画 他
- (7) ブロック別ミーティング
 - 道東ブロック 平成28年 6月16~17日 帯広市、浦幌町 21名(うち指導員10名)
 - 道北ブロック 平成28年 8月 1~ 2日 南富良野町 19名(うち指導員 8名)
 - 道央ブロック 平成28年 8月24~25日 喜茂別町 20名(うち指導員 6名)
 - 道南ブロック 平成28年11月10~11日 八雲町 22名(うち指導員 8名)
- (8) 情報誌「里づくり」の発行 2回(7月、3月)
- (9) web版「里づくり」の配信 毎月

3 推進事業

- (1) 委員会の開催 3回(6月28日、12月8日、3月31日)
- (2) 活動地区との意見交換
鶴居地区(6/23)、里平地区(7/14)、別海地区(7/25)、七飯地区(11/11)、
岩見沢市北村豊正地区(2/28)、湧別地区(3/14)
- (3) ホームページの更新
指導員プロフィール
事業紹介、委員会記録及び活動実績等の情報
- (4) 啓発普及
「新・田舎人」(88~91号)の配布

平成29年度北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業スケジュール(案)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会の開催		第1回							第2回			第3回
委員による意見交換会			湧別地区	別海地区 (厚床地区)				七飯地区			岩見沢市 北村豊正地区	
指導員 関連事業	Web版 里づくり (毎月)	第1回 幹事会 (札幌)	道東ﾌﾞｯｸ (釧路)	情報誌 里づくり 15号	道北ﾌﾞｯｸ (留萌)	地域づくり 研修会 (札幌) 道央ﾌﾞｯｸ (日高)	現地研修 (檜山)	道南ﾌﾞｯｸ (渡島)		第2回 幹事会 (札幌) 指導員会 (札幌)	全国研修 (東京) 情報誌 里づくり 16号	
その他			農水省 全国担当 者会議									

平成29年度北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業計画(案)

1 地域活動支援事業

- (1) 実践活動地区(4地区、括弧は年次)
 - 湧別町湧別地区(3) 別海町別海地区(2) 七飯町七飯地区(2)
 - 岩見沢市北村豊正地区(2)
- (2) 住民意識醸成地区(1地区)
 - 根室市厚床地区(仮称)

2 研修事業

- (1) 指導員の委嘱
- (2) 全国研修へ指導員を派遣
- (3) 地域づくり研修会(9月(4~9日)札幌市 テーマ「農村と観光」)
- (4) 現地研修(10月(17~19日)江差町・乙部町)
- (5) 北海道ふるさと・水と土指導員会(1月)
- (6) 北海道ふるさと・水と土指導員会幹事会(5月24日、1月)
- (7) 指導員ブロック別ミーティング(4ブロック)
 - 道東ブロック 6月 釧路管内
 - 道北ブロック 8月1~2日(小平町)
 - 道央ブロック 9月 日高管内
 - 道南ブロック 11月 渡島管内
- (8) 情報誌「里づくり」の発行 2回(7月、2月)
- (9) web版「里づくり」の配信 毎月

3 推進事業

- (1) 委員会の開催 3回(5月、12月、3月)
- (2) 活動地区との意見交換、事業採択前の地区への支援
- (3) ホームページの更新
 - 指導員プロフィール
 - 事業紹介、委員会記録及び活動実績等の情報
- (4) 啓発普及
 - 「新・田舎人」(92~95号)の配布

鶴居村鶴居地区に係る評価について

鶴居村鶴居地区の評価に係る委員意見

1 活動の状況

当地区は平成24年4月に設立した「鶴居スローライフ実行委員会」が、鶴居らしい食の発掘・開発や美しい景観などを体感するためのウォーキングなどのメニューに取り組みながらも、専門的な知見の不足等により進捗状況が思わしくない状況の中、平成26年度から本事業の対象区として活動を展開してきたところである。

活動の目標としていた①フットパスの取組み②地域色の取組みの目的は十分に達成されたと評価される。

フットパスについては、初年度はワークショップの開催や村民を対象にした健康ウォーキングの実施。2年目は、新たなコースの設置やガイドの養成に腐心し、最終年はフットパスによる村民交流、ガイドブックの作成など着実な進展が見られる。

地元食材を活用した取組みについては、初年度はヨーグルト料理教室、地域色に係る学習会を実施。2年目は食品加工や包装デザインに関する勉強会や数度にわたる試食会・料理教室の開催。3年目はヨーロッパの地産地消を学ぶ講習会を実施した。また、2年目から小規模ながら有機栽培に取り組んだことについても評価される。〔雨山委員〕

目標に向かって概ね順調に進んでいるように思える。リーダーがしっかりしていることと、メンバーが興味を持って楽しく活動していることが良い。ただ、フットパス、地域食の開発、有機栽培と活動が多岐に渡っているので、上手く役割分担をして個人の負担が偏り過ぎないように注意が必要。フットパスに関しては、村民が無料で利用できる日を設けていたが、その日以外にも他地域から来た友人等と一緒に歩けるように、村民の利用料を出来るだけ安く設定していると良いかと思う。地域食やフットパスはともすれば地域外の人を対象にしてしまいがちなもので、村民(村内)への定着を息長く続けてほしい。3年間で学習や実践は順調に来ているようなので、この勢いで進んで行くことを期待している。〔大熊委員〕

フットパスによる地域住民との交流と地元食材を活用した地域づくりの活動について、年度毎に順調に活動を行っている。フットパスについても殉じコースの増設や利用者の増加に向けた取組みを行っている。また、食の部分についても、レシピ開発や、有機栽培に向けた肥料づくりなどが積極的に進められている。〔小林委員〕

2 活動への支援体制

行政、関係団体の支援体制についても非常に良好と思料される。

とくに、役場の産業振興課のスタッフが当活動団体と緊密な連絡調整、活動への助言や働きかけを行っているとともに、町内のJAや観光協会との連携も円滑に行われている。

また、当活動団体のメンバーに本事業の指導員が参画していることも大きな力となっていると言えよう。

さらに、釧路総合振興局の担当者が同活動団体への助言、セミナーやイベント開催時などへ

の人材派遣の協力を含めサポート体制が大きかったものと判断される。

今後、当地区の活動をさらに発展・充実させるためには、活動団体の自助努力は勿論のこと、村役場をはじめ行政、関係団体の物心両面の支援が期待される。〔雨山委員〕

行政機関とは連絡も取り合い活動応援もあったようで、支援体制は取れているように思う。また、農協、商工会、グループ等、様々な組織と連携をとっているのは活動をスムーズに行う為にも良いと思う。〔大熊委員〕

フットパスの活動から始まり、食をテーマとした活動に拡大することで、活動を行っているメンバーの裾野が広がった。さらに観光協会や役場との連携、さらには町外の地域づくりの団体と積極的な連携を行うことで、活動が順調に拡大している。〔小林委員〕

3 ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性

本事業の目的達成の可能性は高いものと考察される。

当活動団体が目標とした地域食、有機栽培、フットパスを通じた取り組みにおいて、持続可能な「美しい村」へと進化するための過程を見ると目標はおおむね達成出来ている。

当地区は、採択前から活動団体がそれなりの実績と下地があったことも成果を高める要因であったとも言える。

本事業を活用した、村民への健康増進と村外の観光客を対象としたフットパスのコース整備・新設は地域資源の再認識に繋がったものであり、今後、村の観光協会に引き継がれることとなった面も評価される。

また、イタリアで提唱されたスローフード運動を冠した当活動団体は、当地区の伝統的な食文化や地域の食材を見直しての地域色開発、レシピ作りに勤しむとともに、生ごみたい肥を活用した有機栽培への取り組みなど着実な活動は評価される。

今後は、鶴居村内から釧路管内へ農山漁村の女性の活動の輪を広げたいとしているが、そのためにも地道な活動・情報発信に期待するものである。〔雨山委員〕

リーダーを始めメンバーの人たちが前向きに進めているので、達成の可能性は大きいと思う。ただ、鶴居村は人口の約半分が他地域からの移住者で構成されているため、元からの住民との間が分断されがちになっている。より目的の達成に近づくためには、活動に参加しやすい移住者や若い人たちばかりではなく、地元の高齢の人たちにも理解が広がり活動に参加してもらえるよう働きかけをすることが大切と思う。

また、活動の継続のためには活動資金が必要なので、フットパス、地元食の販売、会費等できちんと収入をあげられるように運営してほしい。〔大熊委員〕

フットパスが町内においてコースの数、参加者ともに一定の定着を見せている。さらに、地元食材の部分においてもホエーを活用した有機肥料の作成からはじまり、地域食の開発とその発信などが進められていることから当初の目的が達成される可能性は十分高い。〔小林委員〕

鶴居村鶴居地区に係る評価（案）

1 鶴居地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要（主にふる水事業の実施前の状況）

本地区の鶴居村は、明治 18 年、釧路市から移住した 27 戸が農業を始め、昭和 12 年に現在の釧路市阿寒町から分村し誕生した。釧路総合振興局管内のほぼ中央、雄阿寒岳東南の山麓に位置し、東西に 23 km、南北に 42 km、面積は 572 km²、人口約 2,500 人、世帯数約 1,000 戸の村であり、東は標茶町、西は釧路市阿寒町、南は釧路市と釧路町、北は弟子屈町に隣接し、阿寒カルデラ外輪山を貫流する雪裡川、幌呂川、久著呂川の流域に広がる雪裡、幌呂、久著呂の 3 原野で構成されている。

気候は冷涼であり、夏季は釧路沖で発生する海霧（ガス）に時折覆われることはあるが、内陸型気候により比較的温暖な日が続き、冬季は雪が少なく、晴天の日が多い。

酪農業が村の基幹産業であり、90 戸の酪農家が約 1 万 3 千頭の乳牛を飼養している。法人化による大規模経営と畜産環境のクリーン化が進められており、乳質コンテストでは幾度と日本一に輝き、良質な牛乳を生産している。村内で生産された良質乳を使用したナチュラルチーズ「鶴居」は、中央酪農会議主催のオールジャパンナチュラルチーズコンテストにおいて、初出品から最高賞の農林水産大臣賞を含む 5 大会連続受賞を果たしている。

鶴居村は、天然記念物タンチョウの貴重な生息地であり、欧州にも引けをとらない豊かな自然や美しい農村景観を有しており、平成 20 年には「日本で最も美しい村連合」に加盟し、現在 63 を数える他の加盟町村・地域と美しさを競っている。

平成 16 年農業者が中心となり、村民との交流をテーマに農村観光推進団体「鶴居村あぐりねっとわーく」が発足し、農家民宿、酪農体験、修学旅行の受け入れなどを行い、平成 19 年には地域一帯となった取組に移行するため、鶴居村観光協会内に「地域づくり型観光調査研究委員会」を設置し、魅力的な地域づくり型観光のメニューづくりなどに取り組んでいる。

このように、産業や地域資源を活かした観光振興が進められている一方、村民の暮らしをベースにした取組も必要ではないかという考えを持つ、子育て世代中心の婦人グループやグリーンツーリズムを実践している酪農家、商工業者の青年グループなどが集まり、「鶴居スローライフ実行委員会」を平成 24 年 4 月に設立。鶴居の牧歌的な風土を活かした「ここだからできるスローライフ～鶴居型スローライフ」の村民・観光客への提案、定着が必要と考え、鶴居らしい食の発掘・開発や、美しい景観などを体感するためのウォーキングなどのメニューづくりに取り組みながら、鶴居独自の食の提案として、ワインの開発などにも取り組んできたが、専門的な知見が少ないため、メンバーだけでは行き詰まっている状況にあり、進捗が思わしくない状況にあった。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
1 フットパスの取組	26	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道大学の学生達とワークショップの開催、コース設定の検討とコース整備の実施（6月） ・村民を対象とした健康ウォーキングにフットパスコースを取り入れ、村民との意見交換会の実施（10月） ・ワークショップの開催（10月） 講師：北海道大学大学院小林国之助教 ・村民を対象としたフットパス講習会の開催（11月） 講師：タンチョウコミュニティ代表 音成邦仁氏
	27	<ul style="list-style-type: none"> ・新たなフットパスコースの設置と看板の整備（8月） 第2コース「村民の森コース」 ・ガイド（コース案内）養成講習会の開催（8、11月） 講師：和田正宏氏、音成氏 ・フットパス運営に関する勉強会の開催（8月） 講師：和田氏
	28	<ul style="list-style-type: none"> ・フットパスによる村民交流（6月） 講師：和田氏 ・つるいフットパスガイドブック作成（8月） ・フットパス看板作成（9月）
2 地元食材を活用した取組	26	<ul style="list-style-type: none"> ・村民を対象としたヨーグルト料理教室の開催（6月） 講師：服部佐知子氏 ・納涼祭りでのヨーグルト料理の試食会の開催、アンケート調査の実施（7月） ・盆踊り大会でのチーズの試食会の開催、アンケート調査の実施（8月） ・地域食をテーマとした講演会の開催（8月） 講師：慶應義塾大学 林美香子特任教授 ・地域食を学ぶ学習会の開催（12月） 講師：釧路短期大学 岡本匡代准教授

	27	<ul style="list-style-type: none"> ・食品加工やデザイン包装等に関する勉強会の開催（11月）講師：黒井理恵氏 ・地元食材を活用した試食会・料理教室の開催（7、8、9月）講師：服部氏 ・地域特産品による交流会の開催（1月）講師：いいね！農 style 編集部 伊藤新氏
	28	<ul style="list-style-type: none"> ・料理講習会の開催（11月）ヨーロッパのお洒落な地産地消を学ぶ 講師：vera KARAKIDO、服部氏 ・活動PRパンフの作成
3 安全安心な暮らしにおける有機栽培等の取組	27	<ul style="list-style-type: none"> ・生ゴミを活用した肥料づくり等の講習会及び実習会の開催、土壌菌の繁殖状況の確認（6月～10月） 講師：佐藤美千代氏、菅井まゆみ氏
	28	<ul style="list-style-type: none"> ・生ゴミ堆肥を使用した花の育成実験（10月） ・地域食と有機栽培等活動小冊子作成（3月）

【活動状況写真】

平成 26 年度



フットパスワークショップ（10月）



地域食をテーマとした講演会（8月）

平成 27 年度



フットパス看板設置（8月）



ガイド養成講習会（8月）



ガイド養成講習会（11月）



フットパス運営に関する勉強会（8月）



ホエーによる菌の繁殖を用いた実習会
（6～11月）



土壌菌の繁殖状況の確認（6～11月）

(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会における主な助言内容

- ・ 新製品の開発というのは外に向けての行動であることから、それは2年目以降として、1年目はもっと村内に向けての普及活動を行ってはいかがか。
- ・ 村全戸にある光ケーブルの端末を使って、講習会のレシピを流すなどしてはどうか。
- ・ 移住者が多いため、同じ村民でも意識が全く違うことから、地域全体を巻き込んで欲しい。
- ・ フットパスについて、村民デーを設けて村民は無料で参加できる日を設けてはいかがか。
- ・ 農協の採草地だけではなく、魅力的な牧草地は村内にたくさんあるはず。フットパスのコースをもっと増やしてみてはいかがか。
- ・ 今後は鶴居村内だけではなく、活動範囲を村外に広げ、女性の視点を広げる活動を行ってはいかがか。
- ・ 現在の堆肥作りの活動は、まだ家庭菜園の範疇であり、もっと広く分布させていく必要がある。ホエーの利活用を目指すなら、例えば実行委員会が中心となって、村民がホエーを入手できるシステムを確立してはどうか。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ 地元食材を活用した取組として、1年目は学習会、講習会、ヨーグルト料理教室、ヨーグルト・チーズ試食会及びアンケート調査など村内を中心とした普及啓発などの取組を行った。また、2年目以降、食品加工やデザイン包装に関する勉強会、商品開発、地域特産品による交流会、小冊子の作成を行い、「地域食」に対する村民の関心が高まった。
- ・ フットパスコースを利用した「村民健康ウォーキング」や意見交換会を実施した。村民からは、「こんな所があるなんて知らなかった。」「一般参加者との交流が良かった。」という意見があった。
- ・ 「フットパス郡構想」として、28年度現在開設している4コースに加えて、新たに3コースを開設し、観光客及び村民の憩いの場としての利活用を予定している。
- ・ 村に隣接する標茶町、弟子屈町に地域で女性が活動しているグループがあり、今後連携した活動が可能かどうか検討したい。

(4) 目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
<p>1 フットパスの取組</p> <p>(ア) コースの整備</p> <p>(1) 新設2コースの設置</p> <p>(2) 降雪期を除いた常設運営</p> <p>(3) 年3名程度の案内ガイドの養成</p> <p>(4) 運営など具体的な取組手法の習得</p> <p>(イ) フットパスによる地域づくり</p> <p>(1) 住民活動の活発化と新たな発想の創造</p> <p>(2) 定期的な軽イベントの開催</p> <p>(3) 初年度参加者目標500人</p> <p>(4) 企画運営などの問題点の把握・整理</p>	<p>(1) 「村民の森コース」(H27)、「鶴居市街散策コース」(H28)、「タンチョウの郷コース(下雪裡地区)」(H28)の3コースを設置した。</p> <p>(2) 「村民の森コース」と「タンチョウの郷コース」は、降雪期を除いた常設運営を可能とした。</p> <p>(3) ガイド講習会を開催し、3名のガイドを養成した。</p> <p>(4) 勉強会を開催し知識の向上を図った。</p> <p>(1) 村民との意見交換会やワークショップを開催した。</p> <p>(2) フットパスコースを利用した村民健康ウォーキングや村民との意見交換会を開催した。</p> <p>(3) 初年度約500人がフットパスを利用した。</p> <p>(4) 村民との意見交換会やワークショップを開催した。</p>
<p>2 地元食材を活用した取組</p> <p>(ア) 料理・食品の開発</p> <p>(1) スキルアップ</p> <p>(2) 各年度1品の食品開発</p> <p>(3) 完成度の高い食品開発</p> <p>(4) 商品化に向けた具</p>	<p>(1) 講演会、学習会、勉強会を開催し、スキルアップを図った。</p> <p>(2) ~ (4) ホエーパンとホエードリンクを商品化した。</p>

<p>体的な取組手法の習得</p> <p>(イ) 地元食材を活用した地域づくり</p> <p>(1) 販路開拓につながるPR活動</p> <p>(2) 「レシピ」の配付によるスキルアップ</p>	<p>(1) 祭りでのヨーグルト料理の試食会・アンケート調査などを実施し、「地域食」に対する村民の関心を高めた。</p> <p>(2) ヨーグルトを使ったレシピ集を村民に配付した。</p>
<p>3 安全安心な暮らしにおける有機栽培等の取組</p> <p>(1) 有機栽培技術の向上</p> <p>(2) 安全安心な地域食の普及</p>	<p>(1) ホエーを用いた土壌菌の繁殖実習会を開催し技術向上に努めた。</p> <p>(2) 肥料づくりの講習会を開催するとともに、有機栽培の活動をまとめた小冊子を作成した。</p>

2 鶴居地区の活動の評価について

当該地区の活動を、① 活動の状況、② 活動への支援体制、③ ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性という3つの視点に基づき評価する。

① 活動の状況

当地区は平成24年4月に設立した「鶴居スローライフ実行委員会」が、鶴居の牧歌的な風土を活かした「ここだからできるスローライフ～鶴居型スローライフ」の村民・観光客への提案・定着を目標に、鶴居らしい美しい景観などを体感するためのウォーキングや食の発掘・開発などのメニューに取り組んできた。目標は概ね達成されたと評価される。

第一に、鶴居らしい美しい景観などを体感するためのウォーキングについては、フットパスコースの整備とガイドの養成を行い、村民との交流、ガイドブックの作成など着実な進展が見られる。

第二に、地元食材を活用した取組については、地元食材を活用した試食会・料理教室を開催するとともに、ヨーグルトを使ったレシピ集の町民への配布がなされた。

また、生ゴミを活用した肥料づくりなど循環型スローライフをPRするパンフレットを作成したことも評価される。

② 活動への支援体制

役場、観光協会、JAなど関係機関・団体との連携を重視し、活動が進められてきた。フットパスの活動から始まり、食をテーマとした活動に拡大することで、活動を行っているメンバーの裾野が広がった。さらに観光協会や役場との連携、さらには町外の地域づくりの団体と積極的な連携を行うことで、活動が順調に拡大している。

③ ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

本事業の目的達成の可能性は高いものと考察される。

第一に、町内において複数のコースが整備され、一定の参加者の定着が図られている。村民への健康増進と村外の観光客を対象としたフットパスのコース整備・新設は地域資源の再認識に繋がったものであり、今後、村の観光協会に引き継がれることとなった面も評価される。

第二に、地元食材の部分においてもホエーを活用した有機肥料の作成からはじまり、地域食の開発とその発信などが進められている。

今後は、活動の継続のためには活動資金が必要なことから、フットパス、地元食の販売、会費等により収入を得られる運営を期待するとともに、鶴居村内から釧路管内へ農山漁村の女性の活動の輪を広げたいという目標達成に向けて、地道な活動・情報発信に期待するものである。

日高町里平地区に係る評価について

日高町里平地区の評価に係る委員意見

1 活動の状況

当地区は平成23年度に農業者6名が「里平地域活性化協議会」を設立し、食づくりと環境づくりの両面から2年間にわたり都市と農村の交流促進や地域活性化について模索してきた。

平成26年度に「食楽カモミールの会」を設立し、本事業の対象区となったところである。

当初は①里平の食や歴史、伝統文化などの発掘・開発②それらを活かし地域住民自身が輝き、来訪者に感動を与える一ことを目標に地域の食材を利用した活動を展開してきたところである。

初年度は麴と地元食材を活かした「里平御膳」や同御膳を設えるための手芸・工芸など活動の項目も多岐に亘り、先進地研修や勉強会を開催した。

2年目は本委員会の助言等もあり、活動の目標を麴造りのみに絞り勉強会、実習を主体とした活動であった。

最終年は麴小屋が完成し、老舗麴店の「味」を引き継ぎ麴の販売にこぎつけた。

3年間の活動を総括すると、当初は活動の目標が多岐に亘り、試行錯誤を繰り返し「里平御膳」も定着に至らず中途半端が懸念されたが、2年目から麴づくりに特化し、会員から「当地域から麴づくりを絶やさず頑張りたい」「玄米麴にもチャレンジしたい」などの思いが聞かれ、今後に向け活動の道が描かれたことは評価される。〔雨山委員〕

心配された迷走も収まり、麴作りに絞った活動が進んでいることは良かった。製品として販売できるように技術を向上させてほしい。今までの活動を見ていると、製品作りや販売などを安易に考える傾向があるように思う。製品作りと販売が軌道に乗るようにコツコツ努力することが必要。安定した品質の麴が作れるようになったら麴の加工品開発にも取り組めるように、情報収集と研究も並行しておこなって欲しい。

メンバーの活動が新聞や雑誌で紹介されて良かったが、記事になるのは最初だけということが多いので、地元の情報紙や飲食店などと繋がり、定期的に情報を発信してもらえると良いと思う。また、親しい少人数の仲間だけで活動するのは、やり易い反面、思考が固定化し活動も先細りになるので、直近の地元は無理としても少し範囲を広げて仲間作りをすることが必須と思う。〔大熊委員〕

事業3年度目に入り、目標を地域で作られてきた「麴」の伝承に絞ることで活動の目的と内容が明確となった。その結果として、麴の製造が開始されるなど、順調に進捗している。〔小林委員〕

活動の素地として地域力活性化（国）事業による取り組みがあった地域である。先の活動では「里平ボール」という新しいメニューの考案がなされ、本活動においてもこの延長線として、当初、地元食材を活用した里平御膳の完成を目的としていた。しかしながら、その実現への具体的な計画は十分なものでなく、活動の主体性にも欠ける状況にあった。そのような中、委員

会から数回にわたって現地にはいり（松木前委員長，小西委員，大熊委員），適宜アドバイスをを行ったこと，また高橋糰店の閉店（？）というきっかけがあり，うまく糰製法の伝承というテーマにしぼった活動に収束していったといえよう。

この地区の活動をすすめるにあたって，諸事情により廃止してしまった地元婦人会の復活（あるいはそれに代わる組織の創出）を考えるなど，地域活性化の基礎となる組織づくりを強く求めていたが，そのための積極的な活動はみられないようであった。ただし，最終年度に新メンバーが加わったことが報告されたことより，徐々にではあるが，地区内での仲間づくりが進んできたとみえ，今後を期待したい。

ここまでには色々と問題があったものの，どうにか方向性が定まり，糰づくりも成功したようであることから，本地区の活動は一定の評価ができるといえよう。今後，糰を中心に活動が広がり活性化することを期待する。〔山本座長〕

2 活動への支援体制

日高町、新冠町など行政の支援体制は地域の事情もあり希薄だったように思える。当地区については、手前味噌の感もあるが本委員会の委員等の役割が大きかったのではないかと推測される。とくに、当地区のアドバイザーとしての小西委員の尽力が大きいと考えられる。

今後、当地区（当活動団体）の活動をさらに発展・充実させるためにも、関係団体の支援は不可欠であると考え。〔雨山委員〕

支援体制が十分に整っていたとは言えないように思う。高橋こうじ店、振興局だけではなく、地元のいろいろな組織との連携も必要だったと思う。ネットワークが広がれば支援だけではなく人の繋がりもできるので、メンバーの増員にも結びつく。ふる水事業終了後は振興局の手も離れるので、他団体・他組織とのネットワークの構築が望まれる。〔大熊委員〕

麴を活動の核とすることで、さまざまな関係機関との連携がすすめられている。〔小林委員〕

そもそもこの地区が地域活動支援地区に採択されるための要件を満たしていたのか，振興局担当者は十分に吟味したうえでの推薦であったのか疑問がある。多くの問題点があるにもかかわらず，採択されたからには事業目的に沿った成果を得るため，他の採択地区以上に委員会はじめ関係機関の協力が必要とされた。このことは否定的に捉えることもできるが，この地区の活動がここまでこられたということは，周囲の支援体制が十分にあったと評価することもできる。〔山本座長〕

3 ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性

当活動団体が目標とした地元食材を活用した活動 — 麴と地元食材を活かした「里平御膳」の提供については、同御膳の具体的な展望を見いだせなかった。

しかしながら、麴づくりの拠点を設置し、老舗麴店の「味」を継承する形で販売への道筋をつけたという面では達成したと言える。

今後に向けては麴の販売方法、情報発信を如何にしていくか。少人数の会員をどう広げるの

か。地域の理解の醸成を図りながら、当活動団体としての「麴のブランド」を確立し、販売を確実なものにするなどの課題が多い中で、次のステップへチャレンジすることを期待するものである。〔雨山委員〕

このままではかなり厳しいと思う。課題を整理し解決に向けての努力が必要。せつかく麴小屋も作り、麴の試作も始めたので、いままでの活動を生かし続けてもらいたい。目的が達成できるとメンバーの自信になり、年齢がいても活動することで地域活性に繋がられるモデルケースとして、地域の人たちの励みにもなる。高齢化と人口減少が深刻な地域にとって、明るい材料になる大事な取組みだと思うので成功してほしい。〔大熊委員〕

麴の製造販売が開始されたことで、里平地区の活性化に向けたスタートが切られたと評価できる。今後みつねに活動の目的を見失うことなく、関係機関との連携にもとに進めることで、目的が達成できると考えられる。〔小林委員〕

地域資源の活用という面では、地域の伝統的な麴造りを継承したという点で評価できる。一方、地域活性化に強く結びついているかという点では、まだまだ努力する必要があるだろう。この地区の活動を見てきて、外部から評価をうける機会が極めて少なかったといえる。糶の販売は確かに外部評価のひとつのあり方であるが、活動内容自体を地区内の住民に広く知らせるという活動が不足していたため、結果としてメンバーの広がりが遅れたのであろう。〔山本座長〕

日高町里平地区に係る評価（案）

1 里平地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要

本地区は、北海道日高管内の西部に位置する日高町（旧門別町）と新冠町の2町にまたがっている日高町立里平小学校の校区を区域としている。

地区は、日高町の中心街から北東約45km、新冠町の中心街からは約45km北側の山間に位置し、秋には鮭の遡上が見られる里平川が流れ、最上流に落差25mの里平大滝、その背後には登山愛好家に人気の里平山（標高1,291m）がそびえる自然豊かな中山間地域である。

「里平」はアイヌ語の「ri pira」が語源であり、「高い・崖」を意味している。

地区の人口は約70人、世帯数は約20戸で、産業は農業が中心である。川沿いでは米、ピーマン・きゅうり・じゃがいもなどの野菜類やメロン・西瓜の果物類を作付し、山側では乳牛・肉牛が育てられている。

昭和24年に開校した里平小学校では、平成9年度から山村留学により児童を受け入れており、地区の全戸が山村留学推進協議会員となっている。地区の農家が里親となり、延べ46名の留学生を迎え入れてきたが、平成27年度の地元児童数は5名まで減少し、平成30年3月をもって、同校は廃校となることが決定している。

年々、集落の高齢化・人口減が進む中、平成23年度、農業者6名が「里平地域活性化協議会」を設立。農林水産省の食と地域の交流促進対策交付金事業を活用し、食づくりと環境づくりの両面から都市と農村の交流促進や地域活性化を模索してきた。

この活動は2年間続き、地域活性化への契機となったものの、具体的な活動方針が定められていないことや、住民それぞれの意識の相違等から、会員以外の地域住民の本活動への関わりがなく、地域全体としての活動となっていないなどの課題が浮き彫りになった。

その後、平成26年度に「食楽カモミールの会」を設立。趣旨に賛同する地域のメンバーと地域食材を使用した加工品や調理方法等を開発し、提供することにより、地域活性化と持続的な集落形成の実現を目指すこととした。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
食の開発・販売	26	<ul style="list-style-type: none"> ・美瑛町へ廃校利用レストランの先進地視察（6月） ・東川町へこうじ店の先進地視察（11月） ・新冠町のシェフによる料理研修（8～1月） ・日高町のこうじ店店主によるこうじづくり研修（3月） ・フードライター小西由稀氏による勉強会開催（3月）
	27	<ul style="list-style-type: none"> ・日高町のこうじ店によるこうじづくり指導（11～1月） ・こうじ小屋の移設作業（2～3月） ・北海道大学浅野名誉教授による勉強会開催（10月）
	28	<ul style="list-style-type: none"> ・日高町のこうじ店店主によるこうじづくり研修（12月） ・こうじ小屋の移設作業（10～11月） ・こうじ商品のPRパッケージの作成（11月） ・フードライター小西由稀氏による勉強会開催（2月予定）

【活動状況写真】

H26 活動内容

■ 東川町へこうじ店の先進地視察



■ 日高町のこうじ店店主によるこうじづくり研修



H27 活動内容

■北海道大学浅野名誉教授による勉強会開催



■こうじ小屋の移設作業（2～3月）



H28 活動内容

■日高町のこうじ店店主によるこうじづくり研修

■フットライター小西由稀氏による勉強会開催

(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会における主な助言内容

- ・ 里平御膳やこうじなど食に関わることや工芸・手芸など、活動への興味が多岐にわたっているが、目標を一つに絞ることが必要。具体的に計画できないものは見送るなど、途中で投げ出さず、まずは一つひとつを着実にやり遂げる成功体験が必要では。
- ・ 活動を地域に伝わるこうじづくりの伝承に絞ったのであれば、まずはこうじを確実につくれるようになる、次は販路拡大、次は商品開発と、順を追ってステップアップすべき。
- ・ 里平御膳など地域食メニューを開発したとしても、それを地域の行事など、地域の人が集まるところで試食等をするなど、地域を巻き込む発想を持たないと、地域の食としては定着しない。
- ・ メンバーが全ての作業をみんなでやる、ということは、作業に責任者がいないということ。こうじ製造、販路拡大、商品開発とそれぞれに担当者を置いて責任を追うことが必要では。
- ・ 地域の野菜とこうじをセットにし「漬物づくりセット」として販売したり、こうじを活用したレシピなどを付してこうじを販売するなど、地域のファンになってもらえるリピーターを増やすことが必要。また、地域のこうじづくりを引き継いだ思いなどを顧客や地域の人に知ってもらうための取組を行っては。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ 事業開始当初は、里平御膳メニューの開発やこうじづくりなどの地域食開発、工芸・手芸等の地域性を活かした活動等、活動目標が多岐にわたっていたが、メンバーが6名と少数で活動していることから、活動目標をこうじづくり一つに絞り、事業を行った。
- ・ 平成28年度にこうじ小屋の移設が完了し、こうじについては商品化し、販売を開始。販路拡大や商品開発については、まだ達成していないが、来年度以降取り組む予定。
- ・ 地域の人に向けての地域食の意見交換会（試食会）を開催。こうじづくりに関して新聞等メディアを通して発信しており、今後も引き続き発信予定。また、こうじづくりを引き継いだ思いをパンフレットにし、顧客等に配付している。

(4) 目標の達成度

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
<p>1 地域食材に関する活動</p> <p>(1) こうじ小屋の移設による こうじづくりの拠点設置</p> <p>(2) 里平御膳開発作業の拠点 づくり</p> <p>(3) 里平御膳のレシピづくり</p> <p>(4) こうじ及び里平御膳商品 化に向けた具体的方法の 確立</p> <p>(5) 販売手法及び販売方法の 確立</p>	<p>(1) こうじ小屋を移設し、こうじづくりの拠点を設置した。</p> <p>(2)～(5) 「里平御膳」（地域食）については、里平ボウル等の開発は果たしたが、地域への普及、商品化や販売への具体的展望は見出していない。 こうじについては、商品化し、平成29年2月6日から販売を開始した。</p>
<p>2 情報発信に関する活動</p> <p>(1) 広報誌、インターネット を活用した活動内容の情報 発信</p> <p>(2) 地域内外での行事等への 参加、こうじ料理等の試 食会の開催</p>	<p>(1) こうじの販売開始について、新聞記事（2社）、インターネットにて情報発信した。</p> <p>(2) 平成29年2月、地域住民などこうじや地域食材を活用した意見交換会（試食会）を開催。 今後、地域内外でのイベントへの参加を計画。</p>

2 里平地区の活動の評価について

当該地区の活動を、①活動の状況、②活動への支援体制、③ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性、という三つの視点に基づき評価する。

① 活動の状況

当地区は平成23年度に農業者6名が「里平地域活性化協議会」を設立し、食づくりと環境づくりの両面から2年間にわたり地域力活性化（国）事業により、都市と農村の交流促進や地域活性化について模索し、平成26年度に「食楽カモミールの会」を設立し、本事業の対象区となったところである。

当初は、麴と地元食材を活かした「里平御膳」や同御膳を設えるための手芸・工芸など活動の項目も多岐にわたり、その実現への具体的な計画は十分なものでなく、活動の主体性にも欠ける状況にあった。

事業2年目以降は、目標を地域で作られてきた麴の伝承に絞ることで活動の目的と

内容が明確となり、最終年は麴小屋が完成し、老舗麴店の「味」を引き継ぎ、麴の製造・販売が開始することができたことから、本地区の活動は一定の評価ができるといえよう。

② 活動への支援体制

日高町、新冠町など行政の支援体制は地域の事情もあり希薄だったように思える。

そのような中、本委員会委員が数回にわたって現地に入るなど、他の採択地区以上に委員会ははじめ関係機関の協力が必要とされた。このことは否定的に捉えることもできるが、この地区の活動がここまでこられたということは、周囲の支援体制が十分にあったと評価することもできる。

③ ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性

地域資源の活用という面では、地域の伝統的な麴造りを継承したという点で評価できる。一方、地域活性化に強く結びついているかという点では、まだまだ努力する必要があるだろう。この地区の活動をみてきて、外部から評価をうける機会が極めて少なかったといえる。糴の販売は確かに外部評価のひとつのあり方であるが、活動内容自体を地区内の住民に広く知らせるという活動が不足していたため、結果としてメンバーの広がりが遅れたのであろう。

今後に向けては麴の販売方法、情報発信を如何にしていくか。少人数の会員をどう広げるのか。地域の理解の醸成を図りながら、当活動団体としての「麴のブランド」を確立し、販売を確実なものにするなどの課題が多い中で、次のステップへチャレンジすることを期待するものである。

地域活動支援事業について

活動の評価・検証結果

項目	内容	
事業実施年度	平成28年度	
総合振興局等名	釧路総合振興局	
活動地区名	鶴居地区	
活動団体名	鶴居村スローライフ実行委員会	
活動成果における当初・変更計画との比較	当初・変更	実績
	<p>フットパスを活かした地域交流を図る。</p> <p>地元の食材を活用した「地域食」「有機栽培」に関する取り組みを進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・村民を対象としたフットパスによる交流のため、フットパス、ウォーキングコースの案内ガイドブックを作成した。 ・フットパスコース利用のための看板設置等の整備を行った。 ・講師を招き、村民を対象としたフットパス交流会を実施した。 ・生ゴミを利用した肥料を用いて、スイセンの育成実験を行った。 ・日本在住のウクライナ人料理研究家を招き、地元食材を活用した料理教室を開催した。 ・村内外へ本取組をPRするため、生ゴミを活用した肥料づくりやチーズ・ヨーグルト等の乳製品を用いたレシピ集を発行し、農村にある食文化を広げた。
活動状況写真 (別添可)	<p>フットパス交流会の様子</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	

フットパスガイドブック

循環型スローライフの智恵



ウクライナ料理講習会



総合振興局等から見た活動地区及び活動団体の状況

講師を招いた講習会や関係者同士の検討会など、様々な活動が行われました。

6月に行われたふるさと水と土委員の現地調査では、今までの活動の実績やこれからの活動の課題について、スローライフ実行委員会メンバー活発な議論が行われました。

3年間の活動をとおして、フットパスに関しては、案内看板や、ガイドブック作成により、継続的に取り組んでいく体制を固めることができました。

地域食、有機栽培に関しては、村全体への取組の拡がりに向け3年間で得た知識や経験、レシピ集などを活用したスローライフ実行委員会の活動が期待されます。

鶴居村鶴居地区

採択年度	H25年度	活動団体名	鶴居村スローライフ実行委員会
H26年度までの活動実績等			
<p>1 鶴居村スローライフ実行委員会の発足</p> <p>平成24年4月、自然の豊かさや地域資源の魅力を認識して、ゆっくり楽しく豊かな時間を過ごす鶴居村ならではのライフスタイルの提案を活動の目的に、子育て世代中心の婦人グループや都市と交流を実践する酪農家、商工青年グループなどが集い発足した。具体的な活動展開を検討する期間を経て、平成26年度からふる水事業を活用し、実践活動に移行する。</p> <p>2 鶴居村の景観、自然環境を体感する「フットパス」を活かした地域交流に関して</p> <p>ア 北海道大学の学生約40名を交えてワークショップを開催し、コース設定の検討と共に路体に木片チップを敷き均すなどコース整備を行った。(6/28)</p> <p>イ 村役場が企画する健康促進ウォーキング(村民35名参加)にコースを組み入れ、フットパスを活用した地域交流に取り組んだ。</p> <p>また、北海道大学の小林助教を招聘し、ウォーキング後にフットパスの活用についてワークショップを開催した。活用目的を具体的にどう確立させるのかなどの課題を検討し、村内における活用向上を図りながら村外に対しても情報発信を行うなど、他地域からの交流を促す形が理想であるとの考えに基づき、更に検討を重ねることとした。(10/31)</p> <p>ウ タンチョウコミュニティ代表の音成氏がガイドを務めた「根釧ツーリズムを考える集い」において、フットパス講習会(村民20名参加)を開催し、交流を図った。(11/12)</p> <p>3 地元の食材を活用した「地域食」に関わる取組みに関して</p> <p>ア 学生を交えたフットパスに係るワークショップに合わせて、地元の牛乳を使ったヨーグルト料理の試食会を行った。(6/28)</p> <p>イ 村の納涼まつり(7/25)会場において地元産牛乳を使ったヨーグルト料理、盆踊り大会(8/16)ではチーズ料理の試食会を行い、アンケート調査(各100名)を実施した。</p> <p>ウ 慶応義塾大学の林美香子特任教授を招聘し、「地域食」を学ぶため「食で地域を再発見～地元で食べる大切さ～」をテーマとした地域づくり講演会を開催した。講演会には、村内を始め近隣市町村から約150名が参加した。(8/20)</p> <p>エ 釧路短期大学の岡本匡代准教授を招聘し、「チーズから鹿肉まで、地域で食べる大切さ」をテーマに地域食の重要性を学ぶ学習会を開催した。村民約20名が参加し鹿肉の栄養素などについて学んだ。(12/12)</p>			
H27年度活動実績			
<p>1 鶴居村の景観、自然環境を体感する「フットパス」を活かした地域交流に関して</p> <p>ア 新たなフットパスのコースや、気軽に参加できるウォーキングコースを設置し、管理運営に関する取組みを具体的に検討した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「鶴居市街散策コース」設置検討(H28年度開設予定)(8/6) ・ 第2コース「村民の森コース」看板設置(8/10) ・ 第2コース「村民の森コース」開設(8/31) ・ 「タンチョウの郷コース(下雪裡地区)」設置検討(H28年度開設予定)(11/18) <p>イ ガイド(コース案内)養成のための講習会を開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「鶴居市街散策コース」ガイド講習会(8/6) ・ 第2コース「村民の森コース」ガイド講習会(8/31) ・ 「タンチョウの郷コース(下雪裡地区)」ガイド講習会(11/18) <p>ウ フットパス運営等に関する勉強会を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 村内コースの設置及び利用方法などの勉強会を実施(8/6、11/18) 			

エ 村民のフットパスへの更なる関心を促すため、コースを活用した交流会のための村民対象探勝会（村民の森コース）を予定していたが、暴風雪のため中止した。（11/24）

オ フットパス、ウォーキングコースの案内ガイドブックの作成を予定していたが勉強会講習会での意見交換にて、今後のフットパスコースの増設を記載したフットパス郡（ウォーキングマップ）ガイドブックを来年度に作成し、更なる情報発信を図ることとした。（11/18）

2 地元の食材を活用した「地域食」「有機栽培」に関わる取組みに関して

ア 地元食材を活用した食品開発に備え、食品加工やデザイン包装等に関する勉強会を開催し、「地域食」強いては「地域づくり」への村民の関心を深め、地域活性化を推し進める取組みを検討した。

イ 地元食材を活用した試食会や料理教室を開催しながら、学校給食を活用した食育活動への取組みを検討した。

試食会

納涼まつり（7/17）

盆踊り大会（8/16）

ふるさとまつり（9/23）

いいね！農 style 編集部の伊藤新氏を招き、地域特産品による交流会を実施し、地場産食による活性化の重要性を学んだ。（1/14）

ウ 内外へ本取組みをPRするため、レシピ本やパンフレット等の作成を予定していたが勉強会試食会での意見交換にて、チーズ・ヨーグルト等の乳製品を用いたレシピ集を来年度に作成し、農村にある食文化を広げる。（11/18）

エ 生ゴミを活用した肥料づくり等の講習会及び実習会を実施した。

土壌菌の繁殖状況の確認等（10/13 10/23 10/30）

ホエイによる菌の繁殖を用いた実習会

ホエイ菌と生ゴミを畑に散布（7/10 7/17 7/24）

ホエイ菌による堆肥作り実験（牡蠣貝殻、米ぬか、はちみつを使った菌床づくり）

ハーブの苗にホエイ菌噴霧し、生育状況の違いを確認（6月～10月 週1回実施）

活動の状況写真

鶴居村の景観、自然環境を体感する「フットパス」を活かした地域交流に関して



フットパス第2コース看板設置の様子



村民対象の秋の探勝会の様子（第2コース）

「鶴居市街散策コース」ガイド講習会



下雪裡地区フットパス設置検討会

フットパス運営等に関する勉強会



地元の食材を活用した「地域食」「有機栽培」に関わる取組みに関して



ホエイによる菌の繁殖を用いた実習会



土壌菌の繁殖状況の確認



H28年度活動実績

1 鶴居村の景観、自然環境を体感する「フットパス」を活かした地域交流に関して

- ア 村民を対象としたフットパスによる交流のため、フットパス、ウォーキングコースの案内ガイドブックを作成した
- イ フットパスコースの利用のための看板設置等の整備を行った。

2 地元の食材を活用した「地域食」「有機栽培」に関わる取組みに関して

- ア 日本在住のウクライナ人料理研究家に来村いただき、料理教室を開催した。地元食材を活用した簡単で活用できるおもてなし西洋料理とその文化を学んだ。
- イ 内外へ本取組みをPRするため、生ゴミを活用した肥料づくりやチーズ・ヨーグルト等の乳製品を用いたレシピ集を発行した。農村にある食文化を広げた。

mi フットパス交流会の様子



フットパスガイドブック



循環型スローライフの智慧



ウクライナ料理講習会



別記様式第4号

活動計画

団体名	鶴居村スローライフ実行委員会	市町村名	鶴居村	地区名	鶴居地区
めざす姿	<p>- 「鶴居らしさ」につつまれた「美しい村」で暮らす - 鶴居村は、釧路湿原国立公園と阿寒国立公園に囲まれ、恵まれた自然環境を有し、これらの自然環境や気候を活かした酪農や林業を基幹産業とする地域です。特別天然記念物であるタンチョウの貴重な生息地であることから、豊かな自然と美しい農村景観の維持に多くの村民が積極的に取り組んでいます。 鶴居村スローライフ実行委員会では、豊かな自然環境により育まれた酪農業や林業を活かし、乳製品を中心とした安心・安全の地元食材を活用する「食」への取り組みも活発的に取り組んでいます。近年では、安全安心な食づくりへの関心から、酪農村だからできる有機栽培技術の研究に取り組んでいます。また、豊かな自然が日常生活の中に溶け込むきっかけとなるフットパスの整備・利用にも取り組んでいます。地域食・有機栽培・フットパスと、この取り組みにおける「鶴居村らしさ」の発見・育成・発展を通じ、村民は鶴居村の地域特性・風土(テロワール)に対して愛着を感じるようになり、心のゆとりを持って暮らすことができます。 またこれらの活動には、先駆的なリーダーだけでなく、鶴居村の持ち味を活かしてこれまで積極的に活動してきた女性や、未来の鶴居村を担う子供たちといった性別と世代を超えた2600人の村びとの参加とともに、鶴居村の自然や生活に魅力を感じたり、関心を持つ来訪者や観光客が村びとと交流することが必要となります。 そして近隣地域をはじめとする道内外地域との連携により、鶴居村の取り組みは奥行きが広がり、持続可能な「美しい村」へと進化しつづけることができ、次の世代へ継承が可能となります。</p>				
	NO	活動の内容	目標(数値・定性)	解決すべき課題	
活動の方向		<p>フットパスの取り組み 鶴居村の自然、歴史、産業に触れることができるフットパスコースの整備を行う。 →フットパスづくり及び運営への村民等の参加 1. コースの整備について (ア) 自然、景観、食、歴史、施設などの資源を活かしたフットパスコースの設定 (イ) 看板の設置など、フットパスコースの整備(看板の設置など) (ウ) フットパス等の案内ガイドの養成 (エ) フットパス先進地視察(コース内容、地域住民の取組など) →フットパス等を内容とするガイドブックの作成 →フットパスコース整備に関連した自然環境の保全再生活動 2. フットパスによる地域づくりについて (ア) ワークショップの実施開催(地元大学生や村内児童など様々な世代の参加) (イ) 村民を対象としたフットパスによる交流 (ウ) 交流人口の獲得(増加) 専門家の招聘</p>	<p>→フットパス整備へのそんな以外からの参加 →自然や景観、食、歴史、施設等のガイドマップの作成 →フットパス2コースの設置(ルート整備) →村内外(海外含む)からのフットパス利用者の来訪 (ア) 新設2コースを設置する。 (イ) 降雪期除いた常設運営を目指す。 (ウ) 案内ガイドについては、年3名程度養成する。 (エ) 運営など具体的な取り組み手法を習得する。 (ア) 住民活動の活発化と新たな発想を創造する。 (イ) 定期的な軽イベントの開催 (ウ) 初年度は参加者500人を目指す。 (エ) 企画運営などの問題点を把握し整理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> フットパスづくりに関して、ルートになる土地の所有者や酪農業、林業の関係者など様々な人たちが積極的に関わるような仕組み作り(農地、森林などの地権者との調整及び協議が不可欠である)。 →フットパスが持続的に村内外から訪れる人たちに利用される魅力的な広報活動。 →フットパス利用者が村内の他の施設(飲食、宿泊、体験観光など)も円滑に利用できる支援体制 酪農・林業等、農繁期による利用制限など、安全確保の点からも管理体制の整備が必須。 健康促進など村民への利活用への意識醸成が肝心。 交流人口増加のため、イベント開催、ガイド養成に加えてパンフレット、HP(SNSなど)、多彩なPR活動が必要。 関係機関、団体との連携による応援態勢の形成が重要。 	
		<p>「地域食」に関する取り組み(地域食材による「食」の取り組み) 鶴居村産を中心とした地元食材の活用により、鶴居村のファンを増やす「食」の魅力づくりを行う。 1. 料理、食品の開発について (ア) 「地域食」に関する勉強会の実施 (イ) →乳製品活用料理勉強会「地域食」に関する料理講習会の実施 →新製品(お菓子、お土産)開発勉強会の実施 →製造販売等経営勉強会の実施 (ウ) 「地域食」に関する食味、試食会の実施 (エ) →地元食材活用先進地視察(活用方法、地域住民の取り組みなど 地産地消に関する) 2. 地元食材を活用した地域づくりについて (オ) 取組みのPR (カ) →地元食材による料理紹介パンフレットの作成「地域食レシピ」配布 「有機栽培」に関する取り組み 3. 有機栽培方法、土壌菌の研究について (キ) 「有機栽培」に関する勉強会の実施 (ク) 「有機栽培」に関する講習会の実施</p>	<p>→村内外からの幅広い参加者 →長く鶴居村のふるさとの味として提供できる持続可能な料理の開発 →自然や歴史、食にまつわる話題を網羅したパンフレットの作成 (ア) 定期開催によりスキルアップをする。 (イ) 各年度1品の食品開発をする。 (ウ) 完成度の高い開発食品にする。 (エ) 商品化など具体的な取り組み手法を習得する。 (オ) 販路開拓につながるPR活動をする。 (カ) 定期開催によりスキルアップをする。 (キ) 定期開催により栽培有機栽培技術を高める (ク) 安全安心な地域食の普及につなげる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> →様々な人たちが積極的に関わる事ができる仕組み作り →地元食材加工の材料面、施設面のノウハウの確保 →鶴居村の魅力的な「食」の情報発信 →村内外での販売等の経営方法 食品づくり、加工技術の向上 衛生管理の徹底 販売促進への市場調査及び商品PR 有機栽培技術の向上 地域食との関連を深める 	

活動事項	関連NO	平成26年度			平成27年度			平成28年度			最終目標			
		内容	予算額(千円)	年度目標	実績額(円)	内容	予算額(千円)	年度目標	実績額(円)	内容		予算額(千円)	年度目標	実績額(円)
フットパスの取り組み		コース1の整備 コース1の管理 フットパス関連自然保全活動(フットパスコースの維持・草刈りなど)	100 40 20	看板設置 草刈等労務作業2回 上記作業に係る燃料	19,656 0 0	コース1の整備 コース1、2の管理 フットパス関連自然保全活動(フットパスコースの維持・草刈りなど)	200 100 80 40	看板設置、整地 草刈等労務作業2回 上記作業に係る燃料	138,802	新コース設置判断 コース1、2の管理 フットパス関連自然保全活動(フットパスコースの維持・草刈りなど)	40	可否 草刈に係る燃料 看板の設置	0 199,800	
		案内ガイド養成	15	講習会1回	0	案内ガイド養成	50 15	講習会 2 1回	15,000	案内ガイド養成		講習会1回		
		先進地視察	50	別海町1回	0									
		コース設定検討		コース2の検討	-	コース設定検討		コース3の検討 フットパス1の検証		コース設定検討				
		ワークショップ開催	65 60 35	小林教授招聘1回 上記に係る旅費	67,500 46,940	実行委員会への助言 ワークショップの実施	400 30 35	小林教授-Dkod 黒井氏招聘1回 上記に係る旅費	28,000 42,330	実行委員会への助言	30 35	小林教授招聘1回 上記に係る旅費		
		村民交流3回	45 45	ガイド付き 4 3回	15,000	村民交流3回	40 30	ガイド付き2回	22,500	村民交流3回	15	ガイド付き1回	15,000	
		交流人口増、PR 先進地視察		ネット配信、IP電話活用	-	交流人口増、PR	50	ガイドパンフ印刷費		交流人口増、PR	500	ガイドパンフ印刷費	249,912	
地元食材による「食」の取り組みと安心安全な暮らしにおける有機栽培の取り組み		勉強会1 「地域食」に関する講演	30 35 30	林美香子氏招聘1回 上記旅費 勉強会に係る消耗品費	60,000 49,840 0	食品加工に関わる勉強会 乳製品活用料理勉強会の実施	30 35 30 150	食品加工に関わる講師 上記旅費 勉強会に係る消耗品費	28,300 67,783 0	勉強会	30 35	管理業務に関わる講師 上記旅費 食品加工に関わる講師 上記旅費	104,500 60,155	
		勉強会2	30 35 30	地域食の重要性に関わる講師 上記旅費 勉強会に係る消耗品費	20,000 2,920 54,281	食品開発実習	200 120	材料費×3回	155,019			材料費×1回	158,208	
		勉強会3 乳製品活用料理勉強会の実施	30 35 150	乳製品の効用に関わる講師 上記旅費	0 0	食味、試食会 ワークショップ	400 200	材料費×4回	243,430					
		講習会	30 120	講師×3回 材料費×3回	30,000 221,710	有機栽培に関する勉強会	30 35 30	有機栽培に関わる講師 上記旅費 勉強会に係る消耗品費	37,000 58,330 0					
		食味(イベント時)	150	材料費×5回	463,604	土壌菌に関する勉強会	30 35 30	土壌菌に関わる講師 上記旅費 勉強会に係る消耗品費	29,500 62,020 0					
		試食会(村民対象)	200	材料費×1回	264,718	有機栽培実習	420	材料費×6回	163,635				ワークショップ	77,760
		食育活動	130	材料費×1回	0	ワークショップ	180	材料費×3回	126,370	食育活動	600	材料費×6回		
		取組みのPR		ネット配信、IP電話活用	-	活動報告	60	パンフレット印刷費	69,120	食のPR	300	開発食品の広告チラシ スローライフ実行委員会 活動PRパンフ	547,560	
		「食」のレシピ印刷 地元食材による料理紹介パンフレット	200 500	800部 村内配布	0									
	関係者等		釧路丹頂農業協同組合 鶴居村森林組合 鶴居村商工会 タンチョウコミュニティ(丹頂保護団体) 上幌呂チーズ研究会 ハーブンマージュ(農村女性起業化グループ)											

別記様式第3号

活動の評価・検証結果

項目	内容	
事業実施年度	平成28年度	
総合振興局等名	日高振興局	
活動地区名	里平地区	
活動団体名	里平食楽カモミールの会	
活動成果における当初・変更計画との比較	<p style="text-align: center;">(当初)変更</p> <p>1 食味・試食会</p> <p>2 麴の商品化・麴小屋移設</p> <p>3 麴づくり指導</p>	<p style="text-align: center;">実績</p> <p>1 麴や地域食材を活用した料理勉強会の開催 【概要】 フードライター小西由稀氏を迎え講演会、試食・意見交換会を実施した。 【結果】 講演会や意見交換会を通じて、商品開発等への意欲が高まった。</p> <p>2 麴づくりの拠点整備 【概要】 麴づくりに使用する室箱製作、商品PR用のリーフレット作成を行った。 【結果】 昨年11月に麴小屋移設が完了し、本年2月から米麴の販売を開始した。 「商品名：生米こうじ」</p> <p>3 麴づくりの技術習得 【概要】 移設後の麴小屋で麴づくり試作を行い課題等を把握するため、高橋こうじ店高橋好子氏を講師に麴づくり研修を行った。 【結果】 温度管理や製品の状態にアドバイスを受け、3回実施した麴試作は全て成功した。</p>
活動の課題	<p>・技術の研鑽 継続的な麴仕込み技術の習得</p> <p>・麴以外の商品開発 麴を活用した関連商品の開発</p> <p>・地域住民及び関係団体 活動団体会員以外の地域住民、行政等との関係構築</p> <p>・活動状況や商品PR ホームページや広報紙への掲載など情報発信</p>	

<p>次年度の活動方向 (活動の改善点等)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・技術の研鑽 農閑期しか麴を仕込まないため、安定的、継続的な仕込み技術の習得が必要であり、情報収集や設備管理を徹底する。 ・麴以外の商品開発 あまざけ・味噌など、生米こうじを活用した関連商品を開発する。 ・地域住民及び関係団体 会員以外の住民、行政等との関わりを持ち、地域おこしに繋げたい。 ・活動状況や商品PR 情報発信のため、ホームページや広報紙、SNS等を活用する。また情報発信を継続するための手法を検討する。
<p>活動状況写真 (別添可)</p>	<p>【勉強会】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>【麴づくりの拠点整備】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>【麴づくり研修】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

<p>総合振興局等から見た活動地区及び活動団体の状況</p>	<p>里平産ななつぼしを使った「生米こうじ」が商品販売を開始、新聞報道も有り道内から注文が来ている状況。農閑期限定で手作りなのが他に例が少なく、昨今の麹ブームと相まってスタートできた。</p> <p>先進地視察、小西講師や北大浅野教授からのご意見を元に、里平にあった活動になり、会員も1名増加した。役場、町内直売所との関係もでき、活動に携わる人数が増加してきた。</p> <p>今後も技術研鑽、会員増加、商品開発、情報発信など活動継続のために必要なことはたくさんあるが、そのために必要な人材との繋がりができており、その人材からの派生も期待できることから、焦らずゆっくりと着実に進んで行ってほしい。</p> <p>地域づくりや地域おこしは簡単ではないが、里平地域の発展を期待させる活動になったと思う。</p>
--------------------------------	---

採択年度	H26 年度	活動団体名	里平食楽カモミールの会
H27年度までの活動実績等			
<p>1. 地域食材を利用した活動に関して</p> <p>(1) 里平御膳開発に向けた料理研修(H26)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H26年6月、美瑛町のレストランビブレにおいて、農家レストランの先進地視察を行った。 ・同7月、地区内生活センターにて里平御膳用ソースのためバジルソース試作を行った。 ・同8月、新冠町レストランアンジェロにて、シェフ野村忍氏を講師として里平御膳用トマトソース、南瓜スープ・カップナータ試作を行った。また、月末に習得技術の再確認を行うために、地区内生活センターにて会員のみで再実習を行った。 ・同8月、地区内生活センターにて里平御膳用のしそジュース試作実習を行った。 ・同10月、アンジェロにて野村氏をアドバイザーとして迎え、第一次試作品作成のためメニュー考察会及び今後の研修内容の詳細検討を行った。 ・H27年1～2月、アンジェロにて野村氏をアドバイザーとして迎え、第一次試作品の作成を行った。 <p>(2) 麴作りの技術の習得に関して(H26～H27)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H26年10月、高橋こうじ店高橋好子氏を講師として、麴作成技術の習得を行った。 ・同11月、地区内生活センターにて麴を利用した飯寿司作り実習を行った。 ・同11月、東川町の平田こうじ店において、麴加工品の販売方法に係る先進地視察を行った。 ・H27年11月～H28年1月、高橋こうじ店に麴づくり研修指導業務を委託し、麴作成技術の習得、技術的課題等の意見交換を行った。 <p>(3) 麴づくりの勉強会開催(H27)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H27年10月、麴づくり研修場所の高橋こうじ店視察、北大農学研究院浅野名誉教授を講師として「発酵学講義」を開催し、専門家からのアドバイスを受けた。 <p>(4) 麴づくりの拠点整備(H27)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・麴の製造拠点を整備するため、活動団体自らが施設整備を行った。 			
H28年度活動実績			
<p>1. 地域食材を利用した活動に関して</p> <p>(1) 麴や地域食材を活用した料理勉強会の開催</p> <p>現地視察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H28年11月に完成した活動団体の「麴小屋」を視察し、麴試作状況等を確認した。 <p>講演会、意見交換会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フードライター小西由稀氏を講師に迎え、麴ブームや販売戦略に関する講演会を開催した。 ・活動団体による麴料理の試食や意見交換を実施し、今後の商品開発等にアドバイスを受けた。 <p>(2) 麴づくりの拠点整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・麴づくりに使用する箱を活動団体自らが製作した。 ・商品PR用のリーフレット等を活動団体自らが作成した。 <p>(3) 麴づくりの技術習得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H28年12月、活動団体の麴小屋における麴作成の課題等を把握するため、高橋こうじ店高橋好子氏を講師として試作を3回実施し、温度管理、製品の状態などにアドバイスを受け3回とも成功した。 			

活動の状況写真

地域食材を利用した活動に関して

(1) 麹や地域食材を活用した料理勉強会の開催

現地視察



講演会、意見交換会



(2) 麹づくりの拠点整備



麹を入れる箱を製作(手前)



商品PRのリーフレットを作成

活動の状況写真

地域食材を利用した活動に関して

(3) 麹づくりの技術習得



麹菌を混ぜる



室箱に小分けする



室蓋をかけて棚に移動



完成した麹の状態を確認

活動計画

団体名	里平食楽カモミールの会	市町村名	日高町	地区名	里平						
めざす姿	里平の食や歴史、伝統文化などを発掘及び開発し、それらを活かして、住んでいる人も楽しみ、来てくれる人たちに感動をもたらす取組を行う										
活動の方向	NO	活動の内容		目標(数値・定性)		解決すべき課題					
		地域食材を利用した活動 昔ながらの麹技術の伝承と麹を活かした地元食材による里平ならではの食づくり 麹と地元食材を活かした里平御膳の提供 ・麹づくり研修 ・麹づくりに係る麹小屋移設 ・麹小屋による麹づくり ・里平御膳開発に向けた料理実習 ・里平御膳の開発(試作) ・販売促進に係る先進地視察 ・食味・試食会 ・販売促進活動		・麹小屋の移設を行い、麹づくりの拠点を設ける。 ・里平御膳開発作業の拠点を作る。 ・里平御膳開発における確実なレシピ作りを行う。 ・麹及び里平御膳商品化に向けた具体的方法を確立する。 ・販売手法及び販売場所の確立を行う。		・農繁期の活動体制に不安がある。 ・先進地域活動事例の情報収集。 ・地域内への情報発信と活動への理解を得る必要がある。 ・販売を行うため、関係部署との協議が必要。 ・衛生管理について徹底する必要がある。					
		・地域性を活かした活動 ・の里平御膳を手芸・工芸品(皿等)を使って提供 ・里平御膳に合う手芸・工芸品の開発 ・工芸家視察		・手芸・工芸品制作作業の拠点を作る。 ・皿、手芸品を開発し、の里平御膳と合わせて提供を行うので、作品テーマの確立を行う。		・アドバイザーからの指導、評価体制が必要 ・材料の確実な確保 ・制作技術の向上 ・御膳にマッチした手芸・工芸品の開発と安定的な供給					
	情報発信に関する活動 活動状況の発信 ・麹や里平御膳の開発内容及び状況の情報発信		・広報誌、インターネットの活用し定期的に活動内容の情報発信を行う。 ・地域内外での行事等への参加、麹料理等の試食会を行い、意見聴取から改善点を見つける。		・活動継続への対応、活動の役割分担の確立。 ・他機関との連携推進、地域活性化への手法検討。						
3年間の活動プロセス	活動事項	関連NO	平成 26年度		平成 27年度		平成 28年度		最終目標	適用事業	
			内容	予算額 千円	年度目標	内容	予算額 千円	年度目標			
	食の開発・販売	先進地視察	87	6月 美瑛町廃校小学校舎利用レストランへ販売促進に係る先進地視察を行う。	先進地視察	400 0	販売促進に係る先進地視察を行う。			里平ブランドの確立	中山間ふるさと・水と土保全対策事業
			108	40月石狩市生振地区の靴加工品販売施設視察し、販売方法に係る先進地視察を行う。 11月東川町平田こうじ店に先進地視察。							
			384 200	新冠町レストランアンジェロシェフを講師に、里平御膳開発(里平ポウル等)に向けた料理研修を行う。(8回)	加工品研修	85 0	新冠町レストランアンジェロシェフを講師とし、里平御膳開発(靴パン、デザート)に向けた料理研修を行う。(7回)	里平御膳の再検証	400 0		
		85 75	11月 日高町厚賀にて高橋好子氏を講師に、麹づくりの技術習得を図る。(5回)	麹づくり実習	600 443	日高町厚賀にて高橋好子氏に麹づくりの技術習得を委託し、商品化に向けた試作品を完成させる。	麹づくり実習	45	里平食楽カモミールの会麹小屋にて高橋好子氏を講師に、新しい施設での麹づくり技術を習得する。		
		300 292	麹小屋移設。 麹菌が付着した床板材等を移設	麹小屋移設	300 255	麹小屋移設。 麹菌が付着した壁板材等を移設	麹づくりの拠点整備	400 121	麹づくりに使用する室箱を作成する。		
								200 52	麹の販売委託を行う 麹の直営販売を行う 麹を活用した商品PRのパッケージ作成		
		34 31	地区内センターにてフードライター小西由稀氏に地域活動の勉強会講師を依頼。	勉強会	40 0	地区内センターにてフードライター小西由稀氏に地域活動の勉強会講師依頼。	食味・料理試食・意見交換会	200 79	モニターツアーの実施を行い、里平御膳の試験提供を行う 麹を活用した料理勉強会を開催し、里平産麹を使用した試食会、意見交換を実施する。		
							440 56	北大 浅野先生の発酵学勉強会に参加。			
工芸品開発・販売				手芸・工芸実習	75 0	成田せいこ氏を講師として迎えバッチワーク等作りの技術の習得を図る(3回)		里平ブランドの確立	中山間ふるさと・水と土保全対策事業		
情報発信・交流促進				講習会	400 0	情報発信手段に関する講習会開催。	コンサルタント委託	500 0	情報発信に係る委託業務。	里平ブランドの確立	中山間ふるさと・水と土保全対策事業
関係者等											

活動の評価・検証結果

項目	内容	
事業実施年度	平成28年度	
総合振興局等名	根室振興局	
活動地区名	別海地区	
活動団体名	チームNKB	
活動成果における当初・変更計画との比較	当初・変更	実績
	先進地視察	鶴居村ハートンツリー視察を行い、ハーブの活用方法及び栽培方法等について、意見交換及び体験研修を行った。
	ハーブ・ガーデン	町有地及び有志各戸でハーブを栽培した。
	ハーブ・キッチン (加工技術研修)	ハーブを使ったソーセージ作りを行った。
活動の課題	<p>ハーブの活用法 ハーブ栽培技術習得後の活用法の検討。</p> <p>ネットワークの拡大 活動組織メンバーだけではなく、酪農女性全体への参加促進 活動内容のPR</p>	
次年度の活動方向 (活動の改善点等)	<p>先進地視察 ハーブの栽培・利活用方法等について体験・意見交換等を行う。</p> <p>親子イベント ネットワーク作りの一環として、親子参加型の加工体験を開催する。</p> <p>栽培技術及び利活用講習会 ハーブの栽培技術及び利活用技術の習得に向けた講習会を開催する。</p> <p>ハーブ・ガーデン 前年度よりも規模を拡大したハーブ・ガーデンの整備を行う。</p> <p>ハーブ・キッチン ハーブを活用した調理加工体験を開催する。</p>	
活動状況写真 (別添可)		
総合振興局等から見た活動地区及び活動団体の状況	<p>ハーブ・キッチンの参加者が、その後もソーセージ作りを行ったりと、少しずつでも広がりを感じている。</p> <p>ハーブの活用法が明確に定まっていないため、今後の展開に不安を感じる部分もある。</p>	

採択年度	H 2 8 年度	活動団体名	チーム N K B
H 2 7 年度までの活動実績等			
<p>1 チーム N K B の発足</p> <p>別海町内の酪農女性、特に道外出身の方は酪農業や家事に追われ、積極的な仲間づくりが進んでいない。また、町内の地域資源は乳製品に偏っており、農家個々が高付加価値商品を開発するには至っていない。このことから、新たな地域資源として、まずはハーブをテーマとした取り組みをすすめ、オール別海の女性の輪づくりを並行させながら地域活性化を目指し発足した。なお、N K B は町内農協の頭文字に由来する。</p> <p>2 現地視察研修の開催</p> <p>日 時：平成 27 年 7 月 23 日</p> <p>場 所：根室市 (有)伊藤牧場</p> <p>参加者：酪農女性名、役場職員、振興局職員</p> <p>内 容：環境・景観、食・食品加工、地域活性化をテーマに講演会を行った。</p>			
H 2 8 年度活動実績			
<p>1 先進地視察</p> <p>日 時：平成 28 年 5 月 18 日</p> <p>場 所：鶴居村 (株)丘の上のわくわくカンパニー</p> <p>参加者：酪農女性 23 名、役場職員、振興局職員</p> <p>内 容：ハーブの活用方法及び栽培方法等について意見交換及び体験研修（ハーブクリーム、ハーブソルト）を行った。</p> <p>2 ハーブ・ガーデン</p> <p>日 時：平成 28 年 5 月下旬～平成 28 年 11 月中旬</p> <p>場 所：別海町役場付近の町有地</p> <p>内 容：先進地視察の際にハーブ苗を購入しハーブ畑を整備した。 (カモミール、タイム、ミント、ローズマリー、バジル、オレガノ、レモンバーム、ナスタチウム)</p> <p>3 ハーブ・キッチン（加工技術研修）</p> <p>日 時：平成 28 年 11 月 11 日</p> <p>場 所：別海町農漁村加工体験施設</p> <p>参加者：酪農女性 6 名、役場職員、振興局職員</p> <p>内 容：ハーブを使ったソーセージ作りを行った。 また、ソーセージを別海町女性農業士会の会合（農業者 50 名、関係機関 13 名参加）で配布した。</p>			

活動の状況（写真・メモ）

先進地視察 「ハーブクリームとハーブソルト」の体験研修



ハーブ・ガーデン 町有地を借りてハーブ栽培



ハーブ・キッチン（加工技術研修）

「ハーブ入りソーセージ」の加工研修



地域活動支援事業に係る予算要求書

事業実施年度	平成29年度			
総合振興局等名	根室振興局			
活動地区名	別海地区	活動団体名	チームNKB	
目的(ねらい)	項目(費用)	内容	金額(円)	積算根拠
先進地視察	使用料及び賃借料 報償費 役務費	先進地(未定)を訪れ栽培・利活用方法等について体験・意見交換を行う。 ▶バス借り上げ ▶講師謝金(4時間*14,000円) ▶体験研修	150,000	
			56,000	
			90,000	
		小計	296,000	
親子イベント	使用料及び賃借料 需用費 役務費	ネットワーク作りの一環として、親子参加型の加工体験の開催。 ▶会場使用料 ▶材料費	10,000	
			40,000	
			1,000	
		小計	51,000	
栽培技術及び利活用講習会	報償費 旅費	ハーブ・ガーデンの取り組みを継続するにあたり、講師(未定)を招聘して、必要な栽培技術及び利活用技術の習得に向けた講習会の開催。 ▶講師謝金(4時間*14,000円) ▶講師旅費(札幌からの航空機往復、1泊2日)	56,000	
			64,000	
		小計	120,000	
ハーブ・ガーデン	需用費 需用費 需用費	ハーブ・ガーデンの整備。 ▶苗 ▶肥料 ▶園芸資材	50,000	
			2,000	
			20,000	
		小計	72,000	
ハーブ・キッチン	使用料及び賃借料 需用費 役務費	ハーブを活用した調理加工体験の開催。 ▶会場使用料 ▶材料費(食材、その他)	20,000	
			40,000	
			1,000	
		小計	61,000	
合計			600,000	
			112,000	報償費
			64,000	旅費
			152,000	需用費
			92,000	役務費
			0	委託料
			180,000	使用料及び賃借料
費目内訳			600,000	

活動計画

団体名	チームNKB			市町村名	別海町		地区名	別海地区			
めざす姿	~花とハーブのネットワークづくり~ 町内の酪農女性、特に道外出身の方は酪農業や家事に追われ、積極的な仲間づくりが進んでいない。また、町内の地域資源は乳製品に偏っており、農家個々が高付加価値商品を開発するには至っていない。このことから、新たな地域資源として、まずはハーブをテーマとした取り組みをすすめ、オール別海の女性の輪づくりを並行させながら、地域の活性化の糸口とする。										
活動の方向	NO	活動の内容		目標(数値・定性)		解決すべき課題					
		酪農女性の仲間づくり 道外出身者の活動の場ということを視野に入れながら、酪農業を営む女性の活動母体(ネットワーク)づくりを進める		・定期的な交流会の開催(年2回)		・普段交流のない酪農女性の参加促進 ・魅力ある活動を継続することにより定期的な交流会の開催					
		ネットワークの拡大 酪農女性を中心とした活動母体に、町内外の他団体(女性中心の団体を想定)を巻き込んでいく		・3年目には他団体との連携		・町内外の女性ネットワークの構築 ・特に関係が希薄な農業者と漁業者のつながり(ネットワーク)の構築					
		ハーブなど新たな地域資源の発掘 寒冷地であり限られた地域資源に、新たな要素を生み出すよう、まずは冷涼地帯に適しているハーブを中心に、新たな地域資源を発掘していく		・各農家でハーブ栽培の普及 -ハーブを使った商品の開発		・栽培技術及び加工技術の習得 -販売方法、販売先の検討					
	別海の魅力発信 上記 ~ の活動について、町内外を問わず広く発信していく		・機関紙の発行		・取組みの認知 ・参加者の拡大						
3年間の活動プロセス	活動事項	関連NO	平成28年度		平成29年度		平成30年度		最終目標	適用事業	
			内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標			内容
	仲間づくり		先進地視察	100,560千円	1回(鶴居村)	先進地視察	296,300千円	1回(道内)			
						児童館(又は加工センター)での親子イベント	51,400千円	1回/年	児童館(又は加工センター)での親子イベント	200千円	2回/年
	ハーブ栽培の取組み		栽培技術講習会	64千円	4回/年	栽培技術及び利活用講習会	120,400千円	1回/年			
			ハーブ・ガーデン(苗・肥料・ネットビニールハウス)	34,480千円	メイン1ヶ所、サブ6ヶ所	ハーブ・ガーデン(苗・肥料)	72,450千円	メイン1ヶ所、サブ7ヶ所	ハーブ・ガーデン(苗・肥料)	150千円	メイン1ヶ所、サブ4ヶ所
			ハーブ・キッチン(加工技術研修)	24,300千円	1回(別海町 鶴居村)	ハーブ・キッチン(調理加工体験 商品開発)	61,200千円	2回/年	ハーブ・キッチン(調理加工体験 商品開発)(海産物を含む)	300千円	2回/年
	商品開発		ハーブ・キッチン(商品の試作)	140千円	4回/年	コーディネーターによる講習会	400千円	4回/年	コーディネーターによる講習会	400千円	4回/年
	情報発信		産業祭での試供品配布	400千円	4回/年	産業祭での試供品配布	400千円	4回/年	産業祭での試供品配布	400千円	4回/年
			農業士会での試供品配布		1回/年	農業士会、酪農女性のつどいで試供品配布	50千円	2回/年	季節販売ブースの確保	50千円	4回/年
								品評会(JA、JF、商工)の開催	50千円	1回/年	
								機関紙の発行(各イベント等)	150千円	1回/年	
							就農イベント・菊と緑への参加	300千円	1回/年		
関係者等	別海町女性農業士会 別海酪農女性のつどい 根室農業改良普及センター		事務局:別海町産業振興部農政課 事務局:別海町産業振興部農政課								

別記様式第3号

活動の評価・検証結果

項目	内容	
事業実施年度	平成 28 年度	
総合振興局等名	渡島総合振興局	
活動地区名	七飯地区	
活動団体名	七飯の食を考える会	
活動成果における当初・変更計画との比較	当初・変更	実績
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動勉強会 1 回/年、11 月 ・ななえ食子ども産地見学(1 回 3ヶ所)2 回/年 6 月、9 月 ・ななえ食子どもフルコ - ス調理体験 1 回/年 10 月 ・ななえ食のレシピ作成 ・ななえ食のパネル作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・「美味しいななえ探検隊」第 1 回 6 月 30 日開催。軍川小学校児童を対象に久保田牧場でチ - ズ作り体験、及びチ - ズと七飯町産野菜を使ったピザ作りの調理体験。 ・「美味しいななえ探検隊」第 2 回 9 月 8 日開催。軍川小学校児童を対象に宮後果樹園でりんごの収穫体験、及びりんごを使ったデザート(アップルグランプル)作りの調理体験。 ・「美味しいななえ探検隊」第 3 回 10 月 16 日～17 日開催。16 日は「七飯の食を考える会」会員を対象に事前学習会。17 日はフレンチレストラン「ル・クリマ函館」の関川シエフ(七飯町出身)を招いて軍川小学校児童を対象にりんごを使ったス - プ作りの調理体験、及び七飯町産の食材を使ったフルコ - ス料理を試食した。また試食前にはテ - プルマナ - の講習会も併せて実施した。 ・「美味しい七飯探検隊 学習会」3 月 7 日～8 日開催。7 日「七飯の食を考える会」会員を対象に食育活動に対するアドバイス及び意見交換。8 日会員及び一般町民を対象に食育の基本をテ - マに学習会 ・「七飯の食を考える会」のエプロン作成。
活動の課題	・各活動計画を実施するためには、今まで以上に早め計画を立て準備する必要がある。	
次年度の活動方向 (活動の改善点等)	・今後の地域活動を円滑に進めるためには、今以上会員の増及び準するスタッフが必要と思われる。	
活動状況写真 (別添可)	・別紙のとおり	
総合振興局等から見た活動地区及び活動団体の状況	・平成 27 年度地域活動支援事業要望時の「七飯の食を考える会」会員は 5 名で始まったが地域活動を実践 PR したことにより、平成 29 年 3 月現在 9 名になった。(賛助会員募集中)	

・美味しいななえ探検隊 第1回 平成28年6月30日



・美味しいななえ探検隊 第2回 平成28年9月8日



・美味しいななえ探検隊 第3回 平成28年10月17日



・美味しいななえ探検隊 学習会 平成29年3月7~8日



七飯地区

採択年度	H27年度	活動団体名	七飯の食を考える会
H27年度までの活動実績等		<p>住民意識醸成地区</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域活動勉強会「美味しい七飯の食を発見！」 <p>講師 竹下 和男（子どもが作る”弁当の日”提唱者） タイトル「ヒトは食により人となる」(食文化が人を育てる) 講演会日時：平成28年1月12日(火)13:00～14:30 場所：七飯町文化センター - スタ - ホ - ル 参加者：160名 ・七飯の食を考える会との意見交換会 <p>日時：平成28年1月12日(火)10:00～12:00 場所：七飯町文化センター - 201号会議室 参加者：12名</p> <p>*子どもには「作って食べる」難しいことを言葉で説明する前に、とにかくやらせることが必要、料理が出来ないということを前提にいろいろやらせることが必要、とにかく体験させるのが大切である。</p> </p>	
H28年度活動実績		<p>「ななえ食」の体験塾に関する取り組み (ななえ食とは、七飯町で生産・加工されたすべての食材)</p> <p>1. 子ども参加型</p> <p>ア「美味しいななえ探検隊」(第1回) 日時：平成28年6月30日(木)8:30～13:00 場所：七飯町立軍川小学校、久保田牧場 参加者：40名 内容：軍川小学校の児童を対象にチ - ズづくりを体験し、作ったチ - ズと地元でとれた野菜を使い調理体験(ピザづくり)を実施した。</p> <p>イ「美味しいななえ探検隊」(第2回) 日時：平成28年9月8日(木)8:30～13:00 場所：七飯町立軍川小学校、宮後果樹園 参加者：40名 内容：軍川小学校の児童を対象にりんご(黄王)の収穫体験し、収穫したりんごを使った調理体験(デザ - トアップルクランブル)を実施した。</p> <p>ウ「美味しいななえ探検隊」(第3回) 日時：平成28年10月17日(月)8:30～13:00 場所：七飯町立軍川小学校 参加者：47名 内容：フレンチレストラン「ル・クリマ函館」の関川シエフ(七飯町出身)を招いて、軍川小学校の児童を対象にス - プづくり(リンゴのポタージュ)の調理体験し、すべて七飯町産の食材を使ったフルコ - ス料理(前菜、ス - プ、メイン、デザ - ト)を試食した。また試食前にはテ - ブルマナ - の講習会も併せて実施した。</p> <p>*子ども達にア～イの体験を通して西洋農業発祥の地の歴史及び七飯町が食材の宝庫だということを再認識出来た。</p>	

「ななえ食」の地域資源に関する取り組み

1 地域住民と生産者（地域講師）の交流・勉強会

ア「美味しいななえ探検隊 学習会」

講師：大熊 久美子

日時：平成29年3月7日（火）～8日（水）15：00～17：00 9：30～11：30

場所：南北海道大沼婦人会館

参加者：7日：12名、8日：14名

内容：札幌市在住の小学生3～6年生を対象とした食育講座（年6回開催）の実施例（農場に出向き命をいただくこと、魚料理）を説明後、七飯の食を考える会が軍川小学校の児童を対象に食育活動を実践していることについてアドバイス及び、食育の基本をテーマに（大切な成長期の食生活について）学習会を開催した。

最後に食に関する匿名女子大生のアンケート結果（今までの食事で一番楽しかった食事は？家族みんなで作り楽しく食べた夕食等）に参加者は感動し講演会は終了した。

活動の状況（写真・メモ）

・美味しい七飯の食を発見！平成28年1月12日

・意見交換会



・美味しいななえ探検隊 第1回 平成28年6月30日



・美味しいななえ探検隊 第2回 平成28年9月8日



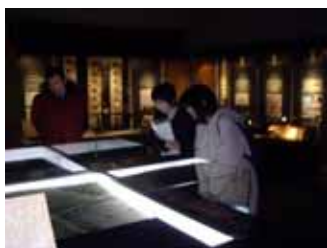
・美味しいななえ探検隊 第3回 平成28年10月17日



・美味しいななえ探検隊 学習会 平成29年3月7～8日

3月7日七飯町歴史館

3月8日



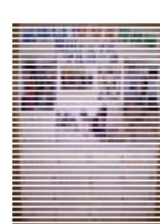
別件（ふる水事業以外の活動実績）

・平成28年12月5日（月）13時～15時半 七飯町文化センター
国際マメ年2016年記念フォーラム 「食べておいしく綺麗になる」 共催

*小豆・大豆の講演会・試食準備など

*次年度へつながる学習会になる。

*会場に「七飯の食を考える会」の活動報告を展示



・平成29年1月20日（金）10時～12時半 七飯町文化センター

「ななえ りんごポタージュ」料理教室

*12月に学んだ豆のレシピを紹介



地域活動支援事業に係る予算要求書(案)

事業実施年度	平成29年度			
総合振興局等名				
活動地区名	七飯	活動団体名	七飯の食を考える会	
目的(ねらい)	項目(費用)	内容	金額(円)	積算根拠
勉強会 「食育・食材を思う」 及び「ななえ食:歴史」 (メンバーに対する意識醸成)	(報償費)	勉強会	56,000	評論家 14,000円×4H
	(旅費)		30,000	JR往復・ホテル1泊 札幌 七飯
	(需用費)		10,000	教材(マジック、紙等)
	(使用料)		0	(七飯町)
	小計		96,000	
「ななえ食:地域食」 体験・調理 (軍川小学校子ども 体験学習3回)	(報償費)	体験(大豆種まき、収穫&調理 (大豆加工))	84,000	講師14,000円×2H×3回
	(需用費)		100,000	(1,2回目 種、肥料、栽培道具)
	(需用費)		50,000	(3回目 食材等)
	(需用費)		10,000	教材(マジック、紙等)
	(需用費)		2,000	ゴミ袋等
小計	246,000			
「ななえ食のフルコ- スALL七飯産」和食 (軍川小学校子ども 体験 板前と調理・試 食会)	(委託料)	板前と調理	56,000	料理長 14,000円×4H
	(委託料)		100,000	米(10kg)野菜(5種)
				果物(3種)
				肉(1種)
	(需用費)		10,000	調味料外1式 教材(マジック、紙等)
小計	166,000			
「ななえ食のレシピ作 成」2回 (メンバーの調理・試 食会)	(委託料)	ななえ食レシピ作成(2品)	84,000	料理長 14,000円×3H×2回
			34,000	レシピ2品の食材
	小計		118,000	
ななえ食の活動PR (会の活動紹介)	(委託料)	ななえ食レシピ及び会の活動 紹介	350,000	パンフ 3000部(デザイン・イラスト含む)
	小計		350,000	
		小計	0	
合計			976,000	
			140,000	報償費
			30,000	旅費
			182,000	需用費
				役務費
			624,000	委託料
				使用料及び賃借料
費目内訳			976,000	

活動計画

団体名	七飯の食を考える会	市町村名	七飯町	地区名	七飯
めざす姿	子どもから大人まで「ななえ食」を学ぶ (七飯町は西洋農業発祥の地であり農作物(大根、人参等根菜類及び長ネギ)の収穫も道南では上位を占め、又緑豊かな森と湖の大沼地域は酪農(肉牛)や水産、まさしく食の宝庫である。) ・未来を担う子ども達及び地域住民に、「ななえ食」を再認識してもらい、産地見学・学習体験等を通して、ふるさとである七飯町に愛着を持つ環境を整える。 ・「ななえ食」を活用した産地見学会(収穫体験)や料理の開発、加工品等により七飯町の魅力を町内外に発信する。				

NO	活動の内容	目標(数値・定性)	解決すべき課題
活動の方向	「ななえ食」の地域資源に関する取組み ・食材(農林水産物)の再発見! ・地域住民と生産者(地域講師)の交流・勉強会	・地域活動勉強会の開催 ・生産者(地元講師)の学習会の開催	・子どもから大人まで「ななえ食」の歴史を知り食を知る企画促進。 ・地域内全体での地域講師の発掘。 ・異世代交流方法(地域講師と子ども達)
	「ななえ食」の体験塾(仮称)「美味しいななえ食探検隊」(食育・調理加工・木育等)に関する取組み ・子ども参加型(地域モデル校:軍川小学校) ・地域住民参加型	・産地見学会・体験学習会及び加工工場見学会の開催	・提供者、ボランティアなど運営問題、指導整備が必要。 ・他校での取組みをする学校等の増加 ・地域内での産地見学場所の選定
	活動内容の地域への周知及び理解の促進	・会のメンバー増員 ・ボランティアスタッフ増加	

活動事項	関連NO	平成28年度			平成29年度			平成30年度			最終目標	適用事業			
		内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標					
「ななえ食」に関する取組み		地域活動勉強会	8.6 15.5 万円	1回/年 (11月)→(3月)	地域活動勉強会	9.6 15.5 万円	1回/年 (11月)	地域活動勉強会	10 万円	1回/年 (5月)	「ななえ食」の再認識及び、地元講師の発掘・登録する。				
								「ななえ食」地域住民産地見学(1回/3ヶ所)	5 万円	1回/年 (9月)					
3年間の活動プロセス 「美味しいななえ食探検隊」に関する取組み		「ななえ食」子ども産地見学(2回/1ヶ所) (1回/3ヶ所)	3.3 44 万円	2回/年 (6月、9月)	「ななえ食」子ども工場見学(1回/3ヶ所)	5 万円	1回/年 (9月)	「ななえ食」子ども工場見学(1回/3ヶ所)	5 万円	1回/年 (9月)	産地見学、体験学習、調理加工を実施することにより、地元の生産者との触れ合いを通して地元の良さを再認識する。	中山間ふるさと・水と土保全対策事業(地域活動支援事業)			
		「ななえ食」子どもフルコ・ス調理体験(洋食)	2.8 25 万円	1回/年 10月	「ななえ食」子ども一汁三菜(ご飯、汁物)調理体験(和食)	16.6 74 万円	1回/年 (10月)	「ななえ食」の地元講師とりまとめパンフ作成	25 万円	3,000部カラ-					
		「ななえ食」のレシピ作成	3.5 万円	3,000部カラ-	「ななえ食」子ども作付け～収穫～調理・加工	24.6 74 万円	3回/年 1回/通年	「ななえ食」の調理体験(レシピ作成)会員を対象	11.8 万円	2回/年 (春、夏)			「ななえ食」のレシピ及び会の活動紹介パンフ作成	3.5 万円	3,000部カラ-
		「ななえ食」のパネル作成	4.5 万円	15部(A1)	「ななえ食」の調理体験(レシピ作成)会員を対象	11.8 万円	2回/年 (春、夏)	「ななえ食」のパネル作成	4.5 万円	15部(A1)					
		「七飯の食を考える会」エブロン作成	13.1 万円						「ななえ食」の体験地図産地パンフ作成	30 万円			3,000部カラ-		
活動内容の地域への周知及び理解の促進											会の活動内容を地域住民に理解してもらうこと及び「ななえ食」の魅力をPRすること。				

関係者等
七飯の食を考える会
七飯町
七飯町立軍川小学校

*「ななえ食」とは、七飯町で生産・加工されたすべての食材(農林畜水産物)

別記様式第3号

活動の評価・検証結果

項目	内容	
事業実施年度	平成28年度	
総合振興局等名	空知総合振興局	
活動地区名	北村豊正地区	
活動団体名	豊正FAM協議会	
活動成果における当初・変更計画との比較	当初・変更	実績
	北の大地マルシェ直売事業	<ul style="list-style-type: none"> ・北の大地マルシェを開設（H28・6・12～H28・10・30）し、約1万人の来客数があった。 ・直売・加工・交流に係る先進地研修として上川の事例を視察（H29・10・31）して、ファームレストランの運営など有用な知見を得た。
	北に大地マルシェ加工事業	<ul style="list-style-type: none"> ・販売活動に係る接客研修会を開催（H28・6・22）し、20名の参加者が地元村の支配人から実技を含めノウハウを学んだ。 ・地元食材を用いた料理講習会を開催（H28・11・22）し、地元イタリアレストランのシェフから料理のノウハウを習得した。
	交流事業～フットパス交流会・落花生まつり	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクニック交流会を実施（H28・7・2）し、参加者同士の交流が図られた。 ・地域力を発揮した農村づくりフォーラムを開催（H29・2・28）し、北大の小林准教授とNPO法人食の自給ネットワークの大熊事務局長から交流と食育について有用な知見を得た。
活動の課題	<p>北の大地マルシェ直売事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効率的な直売所運営を図るための経営ノウハウの習得。 ・カフェ開設に向けたメニューの開発 など <p>北の大地マルシェ加工事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元食材を活かした加工技術の習得及び向上 ・商品化に向けたパッケージデザイン など <p>交流事業～フットパス交流会・落花生まつり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者を拡大するための体制整備。 ・集落の維持・活性化に向けた効果の発揮の方策 など 	

<p>次年度の活動方向 (活動の改善点等)</p>	<p>北の大地マルシェ直売事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直売所の運営(6月～10月) ・先進地視察研修(後志方面)。 <p>北の大地マルシェ加工事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・加工・地場農産物を用いた料理講習会の開催(講師:南極料理人西村淳氏) ・販売に関する実技研修会(講師:札幌マネキン協会スタッフ) <p>交流事業～フットパス交流会・落花生まつり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集落づくり・交流に関する勉強会の実施 ・ピクニック交流会・落花生まつりの開催
<p>活動状況写真 (別添可)</p>	<p>農産物直売所「北の大地マルシェ」の運営状況</p> <p>北の大地マルシェの全景</p>  <p>販売活動に係る接客研修会</p> <p>研修会の様子</p>  <p>ピクニック交流会</p> <p>交流会の様子</p> 

直売・加工・交流に係る先進地研修

美瑛町の直売所の研修風景



地元食材を用いた料理講習会

レストランの厨房での研修



地域力を発揮した農村づくりフォーラム

交流等のお話～小林氏



食農体験等のお話～大熊氏



総合振興局等から見た活動地区及び活動団体の状況

本取組は、豊正FAM協議会における女性グループを中心とする直売所の運営やカフェ開設に向けた料理の試作、落花生を用いた加工品づくり、フットパス等交流の促進など、多様で活発な活動が展開されており、この活動を支援するのが振興局の役割であるが、集落全体（住民）に活動の効果を広げ、集落の維持・活性化に向けて多くの住民が参加した活動になることが重要であり、このような拡大した取組を促していく必要がある。

■ 岩見沢市北村豊正地区

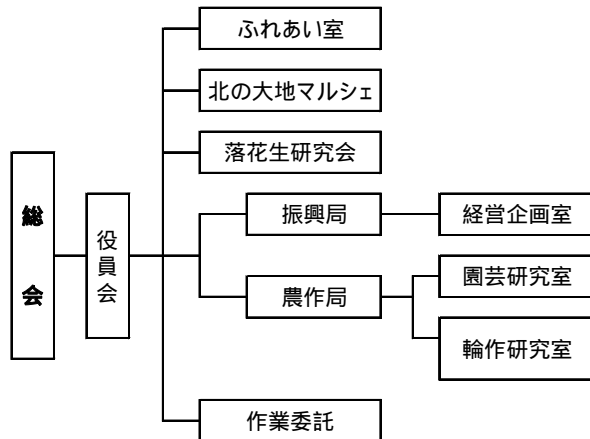
採択年度	H28年度	活動団体名	豊正FAM協議会
------	-------	-------	----------

H27年度までの活動実績等

1 豊正FAM協議会の設立

平成22年、岩見沢市北村豊正地域の活性化に向けた組織として、生産者有志34戸で「豊正FAM協議会」を設立。FAMは、futuer agricultuer make（農業の未来をつくる）の頭文字をとったものである。生産技術や経営の学習及び直売・加工・交流活動などを展開することになった。

〈豊正FAM協議会の組織図〉



2 豊正FAM協議会の直売・交流等の活動

- ・農村資源や景観の良さをPRするためのフットパスイベントである「ピクニック交流会」を開催し、地元野菜を用いた料理を食べながら参加者同士の情報交換を実施。
- ・水稻の直播栽培の面積拡大により遊休化したハウスを用いて始まった落花生の販売や塩ゆでの加工品づくりを実施。
- ・落花生の収穫体験や落花生も用いた料理の試食を行い、生産者と消費者が交流する「落花生まつり」を開催。
- ・落花生のオーナー制度を実施し、約30組の消費者の申し込みを受けた。

H28年度活動実績

1 農産物直売所「北の大地マルシェ」の開設 (H28・6・12～H28・10・30)

- ・地元農協の倉庫を借りて、農産物直売所を長期間にわたり開設し、岩見市内や近郊から約1万人のお客さんが訪れ、好スタートをきった。

2 販売活動に係る接客研修会の開催 (H28・6・22)

- ・接客のノウハウに精通する岩見沢市サンプラザホテルの支配人を講師として、接客に関する研修会を開催。20名の参加者を得て、挨拶の仕方など具体的な技術を習得した。

3 フットパスイベント「ピクニック交流会」の開催 (H28・7・2)

- ・農道を歩き、落花生の料理を試食するなど、参加者同士が交流して好評を得た。

4 直売・加工・交流に係る先進地研修の実施 (H29・10・31)

- ・直売や加工・消費者交流などをテーマとした先進地研修として上川の事例を視察した。

〈視察先〉

- ①ピブレ (美瑛町)：美瑛郊外のレストラン。パンも評判。
- ②丘のまち びえい ふるさと市場直売所 (美瑛町)：総菜も販売する農産物直売所。
- ③美瑛撰果 (美瑛町)：農協が運営するオシャレな直売所・レストラン。
- ④ファームレストランあぜ道より道 (上富良野町)：農家婦人が経営する人気のレストラン。

⑤フラノマルシェ（富良野市）：多くの観光客を集める市街地の直売所。

- ・美瑛町の直売所は、高齢者が楽しんで小遣い稼ぎが出来るため、元気づくりにつながっており、また、上富良野町のファームレストランでは、5名の農家婦人がおもてなしの心で接客し、婦人たちが考えた料理も評判を呼び、年間2万人が訪れている状況を確認した。

5 地元食材を用いた料理講習会の開催（H28・11・22）

- ・北の大地マルシェのカフェ事業の展開に向け、地元イタリアレストラン「ピーノ」のシェフに講師を依頼し、実際に地元食材を用いた料理を試作してもらい、調理方法などを習得した。
- ・参加者は約20人で、食材の加工含め活発な質疑応答を行い、有用な知見を得た。

6 地域力を発揮した農村づくりフォーラムの開催（H29・2・28）

- ・農村の魅力的な自然や風景、食を活かして交流を進めるための知見を得ることを目的として、北大大学院農学研究院准教授の小林国之氏とNPO法人北海道食の自給ネットワークの事務局長の大熊久美子氏を講師として、約70名の参加者を得て、フォーラムを開催した。
- ・小林氏からは、農村集落の現状と交流の意義など、大熊氏からは現代の食の実態と農村における食育の効果などについて説明があった。

活動の状況写真

農産物直売所「北の大地マルシェ」の運営状況

〈北の大地マルシェの全景〉



〈店内の様子〉



販売活動に係る接客研修会

〈研修会の様子〉



〈あいさつの実技研修〉



ピクニック交流会

〈交流会の様子〉



〈交流会の様子〉



直売・加工・交流に係る先進地研修

〈美瑛町の直売所の研修風景〉



〈上富良野町のファームレストランの研修風景〉



地元食材を用いた料理講習会

〈レストランの厨房での研修〉



〈試作料理の試食〉



地域力を発揮した農村づくりフォーラム

〈集落づくり・交流のお話～北大小林氏〉



〈食農体験のお話～食の自給ネットワーク大熊氏〉



地域活動支援事業に係る予算要求書

事業実施年度	平成29年度				
総合振興局等名	空知総合振興局				
活動地区名	岩見沢市北村豊正	活動団体名	豊正FAM協議会		
目的(ねらい)	項目(費用)	内容	金額(円)	積算根拠	
北の大地マルシエ直売事業 生産車組織「北の大地マルシエ」(空き店舗を活用した直売所)を設立し、他地域から多くの人に訪れてもらうとともに、地域住民が集う場所としてのカフェ事業を開業し、地域の活性化を図る。	直売・加工・交流に係る勉強会(使用料及び貸借料)	先進的な直売・加工・消費者交流事例の視察及び現地での意見交換を通じて指導・助言を得る。	100,000	バス借り上げ料 (ニセコ方面視察40人乗)	
	販売促進に係る資材(エプロン・のぼり等)の導入(需用費)	直売所の販売促進を円滑におこなうため、資材等を導入する。	508,200	需用費 エプロン@4,500円*10枚 のぼり@5,520円*10本 横幕@4,000円*2枚 看板@50,000円*6枚 ポイントカード@20円*3,000枚 ジャンパー@8,000円*5枚	
	PRポスター・チラシ作成(需用費)	北の大地マルシエ直売所のPRポスター、チラシを作成し、周知を図る。	260,000	需用費 ポスター-130部 チラシ5,000部 ポスター-(A2)@500円*30部 ポスター-(A3)@450円*100部 チラシ(A5)@40円*5,000部	
		小 計	868,200		
	北の大地マルシエ加工事業 直売所に加工設備を併設し「塩ゆで落花生」の加工販売や地場農産物を活かした加工品及びカフェ開設に向けた研究を行う。	加工及び地場農産物を用いた料理講習会(報償費+旅費+需用費)	加工・地場農産物を用いた料理講習会を行い、加工及び料理技術の向上を図る。(講師:南極料理人西村淳氏)	140,000	報償費 14,000円/人*5H*2回 2回/年 旅費(札幌~岩見沢) 1,360円*2*2回
		農産物等の販売に関する実技研修会(報償費+旅費+需用費)	消費者の関心を引く販売方法に関する実技研修会を行い、販売スキルの向上を図る。(講師:札幌市マネキン協会のスタッフ)	100,000	需用費(食材費)2回 食材費:1,000円/人*30名*2回
				10,880	報償費 5,000円/人*5H*2人*2回 旅費(札幌~岩見沢) 1,360円*2*2人*2回
				60,000	需用費(食材費)2回 材料費:1,000円/人*30名*2回
			小 計	376,320	
		交流事業 ~フットパス・落花生まつり 従前から実施している交流事業の一層の充実を図り、更なる北村豊正ファンを獲得し、他地域や都市との交流、異業種交流、福祉団体との連携など、複合的な活動を進める。	集落づくり・交流推進に関する勉強会(報償費+旅費)	農村集落の現状と交流等の活動に向けた勉強会を開催し、集落づくりや交流活動のノウハウを習得する。(講師:旭川大学 大野先生)	44,000
PRチラシ作成(需用費)			フットパス交流会・落花生まつりの開催案内チラシを作成し、周知を図る。	5,000	使用料(会場借り上げ) 5,000円(4H)
				5,000	需用費 チラシ(A5)@100円*500部*2種類
			小 計	154,000	
				988,200	需用費
			21,320	旅費	
			284,000	報償費	
		105,000	使用料		
合計		60	1,398,520		

活動計画

団体名	豊正FAM協議会	市町村名	岩見沢市	地区名	岩見沢市北村豊正
めざす姿	～ 人が訪れる地域づくりを通して、老後も元気に暮らす ～ 近年、高齢化に伴う離農や店舗の撤退などで過疎化が進行しつつある中、生産者組織「北の大地マルシェ」(空き店舗を活用した直売事業と落花生の加工事業を推進)を設立し、他地域から多くの人に訪れてもらえることで地域の活性化を図る。 また、「北の大地マルシェ」事業と並行し、従前から実施している交流事業(フットパスイベントや落花生まつり)の一層の充実を図り、更なる北村豊正ファンを獲得し、他地域や都市との交流、異業種交流、福祉団体との連携など複合的な活動を進めていく。				

NO	活動の内容	目標(数値・定性)	解決すべき課題
①	北の大地マルシェ直売事業 ・6月上旬から11月上旬まで、JA空き店舗を借用した直売所運営 ・地域住民が集う場所としてのカフェの開業	<初年度> 来場者 期間中900人(予定) 売上 年間750千円(予定) <29以降> 前年度比10%増	・効率的な直売所運営が図れるよう経営ノウハウの習得 ・都市部に対するPRの実施等、効果的な販促活動 ・構成員の積極的な参画と出荷者の増加による品揃えの確保 ・カフェメニューの開発
②	北の大地マルシェ加工事業 ・「塩ゆで落花生」加工販売 ・地場農産物を活かした加工品の研究	<塩ゆで落花生加工販売> 加工品の品質の均一化 <加工品の研究> 加工品の開発 1品	<塩ゆで落花生加工販売> ・加工技術の習得、向上と委託加工受入体制の確立 <加工品の研究> ・加工技術の習得、向上 ・加工品開発に係るパッケージデザイン等の情報収集
③	交流事業 ～ フットパス交流会・落花生まつり ・7月上旬にフットパス交流会、10月上旬に落花生まつりのイベントを開催し、地場農産物の料理を楽しみながら生産者と消費	運営方法等の具体的な取組手法の定着及び集落の様々な層の住民の参加	・参加対象を広げたいが参加者の参加しやすい体制が整備されていない。(バスの確保等) ・継続した活動につなげたい。 ・ 集落の維持・活性化に向けた効果を発揮させたい。

活動事項	関連NO	平成28年度			平成29年度			平成30年度			最終目標	適用事業
		内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標		
北の大地マルシェ直売事業	①	先進地へのバス視察研修	120	1回/年開催	先進地へのバス視察研修	100	1回/年開催	先進地へのバス視察研修	120	1回/年開催	地域の直売所として活動の安定を図る	
	②	販売促進に係る資材(エプロン・のぼり等)費	160	エプロン15枚・のぼり10本・横幕1枚	販売促進に係る資材(のぼり等)費	508	のぼり10本・横幕2枚等	販売促進に係る資材(のぼり等)費	120	のぼり10本・横幕2枚等		
	①	マルシェPRポスター・チラシ作成	120	100部作成 1,000部作成	マルシェPRポスター・チラシ作成	260	130部作成 5,000部作成	マルシェPRポスター・チラシ作成	120	100部作成 1,000部作成		
北の大地マルシェ加工事業	①	加工販売に係るマーケティング研修	20	1回/年開催	加工・地場農産物を用いた料理講習会	205	2回/年開催	加工販売に係るマーケティング研修	50	1回/年開催	地場農産物のPRにつなげる	
	②	加工技術向上に係る研修	70	1回/年開催	販売に関する実技研修会	171	2回/年開催	加工技術向上に係る研修	93	1回/年開催		
	①②③							地場農産物レシピ集作成	140	500部作成		
交流事業	③	コースの整備	110	案内看板の設置							地域のイベントとして定着させる	
	③	フットパス交流推進に係る研修	40	1回/年開催	集落づくり・交流に関する勉強会	54	1回/年開催	地域づくりに係る研修	40	1回/年開催		
	③	フットパス・落花生まつりPRポスター・チラシ作成	160	100部作成 2,000部作成	フットパス・落花生まつりチラシ作成	100	各500部作成	フットパス・落花生まつりPRポスター・チラシ作成	160	100部作成 2,000部作成		

関係者等	岩見沢市農政部農業基盤整備課 JAいわみざわ農業振興部門 宮島沼水鳥・湿地センター 北海土地改良区水土里ネット推進室 空知農業改良普及センター
------	---

活動の評価・検証結果

項目	内容	
事業実施年度	平成28年度	
総合振興局等名	オホーツク総合振興局	
活動地区名	湧別地区	
活動団体名	JAゆうべつ町女性部マルシェ部会	
活動成果における当初・変更計画との比較	当初・変更	実績
	① PR事業 ② 研修事業（先進地視察） ③ 食育事業（芭露小学校） ④ 新商品開発事業	① のぼりとはっぴを購入し、各種イベントでのアピールに活用した。 ② JA中札内村への視察を行った ③ 対象を実施可能な範囲に絞り、芭露小学校でのうどんづくり体験を実施した。 ④ 専門家（食品加工技術センター）の意見を受けながら、牛乳うどん（乾麺）の成分分析業務を行い、賞味期限に関する専門家の見解を頂いた。
活動の課題（成果）	別紙のとおり	
次年度の活動方向（活動の改善点等）	（PR事業） ・食育事業や各種イベントで活用できるお揃いのエプロンやロゴ入りポロシャツなどを用意し、使用する。 ・機能性の表示に関しては、食加技における成果ができ次第検討する。 （先進地視察） ・管内の6次化を展開（韃靼そば等）する雄武町への視察により、次の商品開発や地域活動のヒントを得る。 （食育事業） ・教育機関と調整し、可能な範囲で食育活動を展開する。 （新商品開発） ・牛乳うどんを用いた新たな商品アピールの手法を、オホーツク地域振興機構（食品加工技術センター）と連携しながら展開する	
活動状況写真（別添可）	別紙のとおり	
総合振興局等から見た活動地区及び活動団体の状況	<p>ふる水地域支援活動としては二年目を迎え、活動の内容は昨年度よりも規模が縮小（食育活動の限定化等）はあったものの、「身の背丈にあった活動」を模索した結果であり、活動が継続的に展開されるものと評価します。</p> <p>意見交換を通じ、リーダーの想いや考えが部会員に的確に伝わっている点も評価できます。自分たちの言葉や活動で食の大切さを伝える喜びを味わったことで、活動がさらに充実するものとなるのではないかと期待しています。</p> <p>また、JAのバックアップも有効でした。事務処理だけでなく、責任の分担（軽減）により、マルシェ部会は各種活動の実践に関して「安心」して取組めたことも、評価すべき点であると考えます。</p> <p>課題は、補助がなくなった後の地域支援活動における資金調達です。ふる水事業で自ら実施する「商品化」の取組だけでなく、他の事業の活用も念頭に置きながら、看板商品である「牛乳うどん」の販売額向上を図ることが重要です。その売り上げを原資にできれば、地域活動実施にあたっての経済的基盤を得ることになり、活動の継続を期待でき、産業と地域活動の両立を展開できます。この視点を重視して道及び振興局は、H29年度の支援を展開することが重要と考えます。</p>	

湧別町湧別地区

採択年度	H 2 8 年度	活動団体名	JA ゆうべつ町女性部マルシェ部会
H 2 7 年度までの活動実績等			
<p>1. 女性部マルシェ部会の発足</p> <p>活動団体の前身は「楽酪楽食会」という酪農家の女性たちによる任意団体であり、食品の廃棄等をきっかけに、自ら生産した農畜産物を、対象を限定せずにおいしく食べていただきたいという思いから、「地場産食材の有効活用」をめざしてレシピ試作等を実施してきた。この活動がH 2 5 設立のJA ゆうべつ町女性部のマルシェ部会に引き継がれ、現在に至っている。</p> <p>2. 「牛乳で練ったうどん」の販路拡大</p> <p>マルシェ部会では、会発足当時から、地元湧別における主要産品である牛乳に着目。湧別での贈答品といえば海産物のみであり、農畜産物の地元の特産品がないことに憂い、また「牛乳を食っていただきたい」という思いから、「牛乳うどん」の開発にH 2 5 に着手。以降、何度か試食会を重ね、地元の製麺会社の協力を得ながら、商品化に向けて次に活動を展開。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 成分分析（商品の優位性の評価、賞味期限等の分析） 2) イベント等での宣伝活動、販売活動 3) 教育機関や福祉機関と連携した牛乳うどんの試食 <p>3. 食育活動</p> <p>牛乳うどんを開発した思いを児童たちの前で部会長が語り、そして実際に児童たちが牛乳うどんを練ってみる、こうした取り組みを芭露小学校と連携して実施した。</p>			
H 2 8 年度の活動実績			
<p>マルシェ部会の構成員は全て農業者の女性たちであり、地域ブランド構築に向けたノウハウを有していないこと、また、商品化に向けた「安全性や優位点」等の確認がなされていないことから、先進地の事例や学術経験者等の意見交換により、マルシェ部会が今後どのように活動すべきかを定めること、成分分析等を実施し、商品としての優位性を確認することを基本に、併せて、商品PRのための活動、及び食育活動の更なる展開、を行うこととしていた。</p> <p>(1)商品PR活動</p> <p>本年度はPR活動が効果的に展開できるよう、のぼりと法被を需用費にて6月に購入。これを用いて次のPR活動を行った。</p> <p>サロマ湖100kmウルトラマラソン前夜祭でのPR&販売活動(6月25日) 160袋(乾麺2食入り)を用意して160袋を販売した。</p> <p>JA ゆうべつ町ふれあい祭りでのPR&販売活動(8月6日) 試食活動(乾麺4食分=2袋分)(半生牛乳うどん2人前1袋)を行った 販売27袋(乾麺2食入り)半生牛乳うどん22袋(2人前)半生牛乳うどんinかぼちゃ16袋(2人前)</p> <p>ESTAでのPR&販売活動(8月26日27日) 160袋(乾麺2食入り)を用意して113袋を販売した。 半生牛乳うどん100袋(2人前)半生牛乳うどんinかぼちゃ59袋(2人前)販売</p> <p>湧別町産業まつりでのPR及び販売活動(9月22日) 30袋(乾麺2食入り)を用意して22袋を販売した。 半生牛乳うどん50袋(2人前)販売した</p> <p>JA ゆうべつ町収穫祭でPR&販売活動(10月8日) 18袋(乾麺2食入り)を用意して18食販売した。</p>			

半生牛乳うどん 28 袋 (2 人前) 販売した。

その他

お歳暮用贈答セットの販売 (チラシは別紙 1)

贈答用実績 (年末) A : 28 セット B : 45 セット C : 30 セット

バラ 半生白 77 袋 半生かぼちゃ 99 袋 乾麺 95 袋

(2) 先進地視察

昨年度はマルシェ部会が目指すべき今後の活動のベクトルを見出す目的で、管内での食を通じた活動を展開する「興部町食を考える協議会」を選定したが、本年度は組織ぐるみで商品開発を手掛ける JA 中札内村を視察先に選定した。

日 時 7 月 25 日

場 所 JA 中札内村

内 容 組合長の講和、「枝豆」を商品化した活動内容の紹介、工場等の視察

参加者 マルシェ部会員 4 名、JA ゆうべつ町 2 名

その他 状況写真は「活動状況欄」のとおり

視察レポートは別紙 2 のとおり

(3) 成分分析

昨年度の「半生麺」に引き続いた乾麺における成分分析

委託業務名 平成 28 年度湧別地区商品開発検討業務

発注先 (公財) オホーツク地域振興機構

業務担当員 食品加工技術センター 太田研究課長 武内研究員

工期 1/19 ~ 3/10

委託契約額 155,952 円

完成検査 3/14

(4) 食育活動

昨年度の芭露小での活動が学校側に大変好評であり、食育活動を全校的な企画にしていき学校側の意向があった。全校児童を相手にすることから、周到な企画立案、及びうどんづくり指導や準備後片付けといった現場での苦勞を想定。部会員が無理なく活動できる範疇で取り組みを展開するべきと考え、当初は中学校まで広げたいとしていた食育活動を芭露小学校に絞った。

日 時 2 月 23 日 準備 9 : 00 ~ うどん作り 10 : 20 ~ 会食 12 : 00 ~

参加者 芭露小学校児童 28 名及び先生部会員 9 名、JA 3 名、振興局 2 名

内 容 子供たちの手で実際にうどんを作り、食することで、地域の「食」に関する知識を得てもらおうとともに、食の宝庫である湧別町芭露を認識してもらおう。

(学校側の意義) 総合学習により「地域の食」「地産地消」を伝える

その他 ・写真は活動状況欄のとおり

・進行の概要は別紙 3 のとおり

活動の状況(写真・メモ)

(1)PR 活動

サロマ湖100kmウルトラマラソン前夜祭でのPR&販売活動(6月25日)



JA ゆうべつ町ふれあい祭りでのPR&販売活動(8月6日)



ESTA でのPR&販売活動(8月26日27日)



湧別町産業まつりでのPR及び販売活動(9月22日)



JA ゆうべつ町収穫祭でPR&販売活動(10月8日)



(2) 先進地視察



(3) 成分分析(北海道立オホーツク圏地域食品加工技術センター)略称「食加技」

(食品加工技術センター 太田研究課長より)

○成果品は別紙 4

○乾燥麺の場合は、成分である牛乳の脂肪分に由来すると思われる酸化臭がみられる

○酸化臭が現れた時期から、賞味期限は 3 カ月程度とすることが望ましい

○公益財団法人オホーツク地域振興機構では、「食に関するミニ補助事業」(別紙 5)の公募を昨年度に引き続き行う予定。この牛乳うどんは、たれに乳由来の原料を使用するなどにより可能性を秘めている。公募を検討しては如何か？

この補助事業に関しては、今後検討する(JAを主体とし、マルシェを地域活動に限定することも視野)

(4) 食育活動(湧別町立芭露小学校)

参加者 ・久保 美恵子 ・松田 真理 ・越智 祥子 ・長岡 みどり

・本間 美智子 ・水谷 利子 ・佐々木 さおり

J A 3名

(感想等)

- ・この取組を継続していきたい
- ・縦割り配置としたことで、上級生が下級生の面倒を見ながら作業をしていたことに関心
- ・次年度は可能であれば中学校にも拡大したい。
- ・事業終了後の活動に関する予算の確保





地域活動支援事業に係る予算要求書(案)

事業実施年度	平成29年度				
総合振興局等名	オホーツク総合振興局				
活動地区名	湧別地区	活動団体名	JA湧別町女性部マルシェ部会		
目的(ねらい)	項目(費用)	内容	当初	費目	積算根拠
(PR事業) 地場産農産物を活用した商品を地域住民や一般消費者にPRする	広報活動(需用費)				
			小計	0	
(研修事業) 今後の活動の展開方法を検討する	パス借り上げ料(使用料)、講師謝礼	・6次産業化に関する先進地視察(雄武町ほか)	60,000	使用料	
			小計	60,000	
(食育事業) 地場産農産物のPRを通じた食育活動	食材提供費(需用費)	・小学校及び中学校における食育活動における食材費及び必要な資材の購入	75,000	需用費	食材費(小学校35000、中学校40000)
			90,000	需用費	エプロン、三角巾、ポロシャツ10セット
			小計	165,000	
(新商品開発事業) 新たな試作品の開発に向けた取組	加工施設視察及び新商品開発(使用料)(委託料)	・「食品成分分析(牛乳うどんかりんとう等)」 ・アンケート調査切手代	200,000	委託料	食品成分分析
			10,000	役務費	アンケート調査切手代
			小計	210,000	
			小計	0	
		科目別	165,000	需用費	
			10,000	役務費	
			0	報償費	
			200,000	委託料	
			60,000	使用料	
合計			435,000		

活動計画

団体名		JA湧別町女性部マルシェ部会			市町村名		湧別町		地区名		湧別地区		
めざす姿		活動を通じて開発した商品が、長く愛される「地域ブランド」となるよう、食を通じ地域の活性化を図る											
活動の方向	NO	活動の内容			目標（数値・定性）			解決すべき課題					
	1	P R 事業			地域住民			地域（湧別町）内で、「食」に対する部会の姿勢が認識されていない加工品の開発に対するマルシェ部会の取組が周知されていない。そこで、パンフ等を作成し、部会の取組の周知を図る。					
	2	研修事業			部会員等			構成員は全員農業者であり、地域活動の展開についてノウハウがない。そのため今後の地域活動に活かせるよう、先進地事例を知る。					
	3	食育事業			小中学校、老人ホーム等			湧別町では牛乳をはじめとする農産物や水産物が産出されるが、その「加工」への取組はなされていなかった。そこで、地場産農産物の加工品を「食する」ことを通じ、部会が商品開発を進めたきっかけとなった「食の大切さへの認識」を伝える。					
	4	商品開発			部会員等			部会の活動を通じて開発された商品が「安全」で「機能的」かどうかの数値的根拠がないため、これらを分析に、適切な表示を行い消費者への情報提供を行う。また「流水とうもろこし」のはね品が多いという課題があり、これを活用した新たな商品を開発する					
予算額単位は「千円」													
3年間の活動プロセス	活動事項	関連NO	平成27年度			平成28年度			平成29年度			最終目標	適用事業
			内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標	内容	予算額	年度目標		
	P R 事業	1	パンフ作成			のぼり等作成	147	20枚				地場産農産物や開発した商品をP Rにより、地域ブランドとしての地位を築く	中山間ふるさと・水と土保全対策事業（地域活動支援事業）
	研修事業	2	先進地視察	52	1回（興部）	先進地視察	115	1回（中札内村）	先進地視察	60	1回（雄武町）	今後の方策を検討する	
	食育事業	3	食材提供及び食育事業等	45	3回（小学校1、老人ホーム2）	食材提供及び食育事業等	29	1回（小学校）	食材提供及び食育事業等	165	2回（小・中）及び機材等	取組の内容を理解することで、地場産商品に対する地域住民の意識を醸成する	
商品開発	4	食品成分検査	162	対象：牛乳うどん半生麺	食品成分検査	156	対象：牛乳うどん乾麺	食品成分検査	200	対象：水産物関連商品	新たな商品を開発する。また取組により誕生した商品の品質情報を把握し、安全で安心な地域ブランドとなるよう商品を育てる。		
関係者等		マルシェ部会 J A 湧別町女性部 湧別町農業協同組合 湧別町 湧別町教育委員会											